

「地図帳好き？ 嫌い？」 この県知ってる？」

～12,000人の子どもたちの声から見えてきたもの～

Q. これは何県かな？

簡単。福島だ！！



富山県よ。

京都じゃ
ないかなあ。



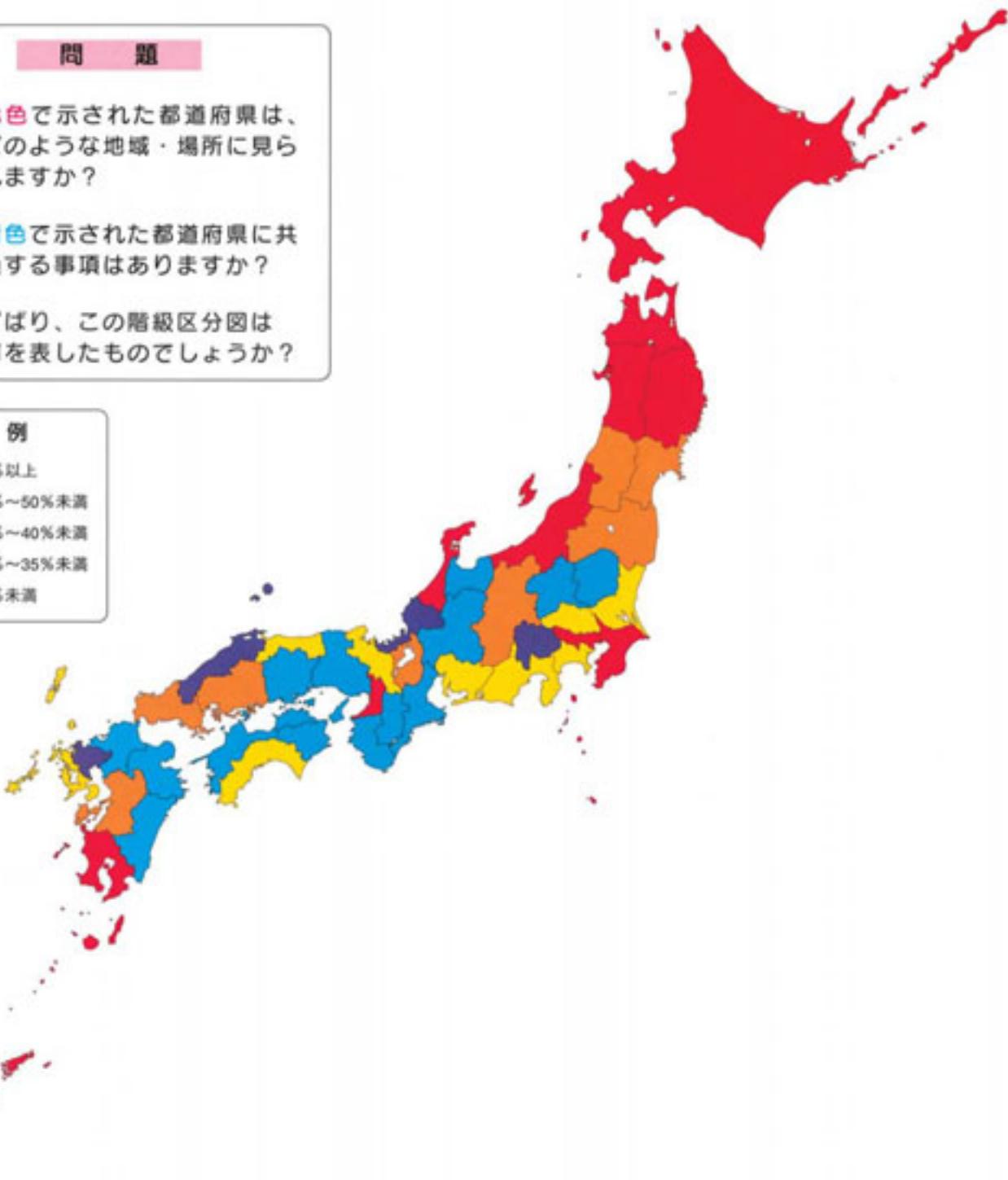
うーん、ちょっと違うなあ・・・

問 題

- Q 1. 赤色で示された都道府県は、どのような地域・場所に見られますか？
- Q 2. 青色で示された都道府県に共通する事項はありますか？
- Q 3. すばり、この階級区分図は何を表したものでしょうか？

凡 例

■	50%以上
■	40%～50%未満
■	35%～40%未満
■	30%～35%未満
■	30%未満



「こどもと地図」特別号 発刊のごあいさつ

(株) 帝国書院
地図・地理普及特別班

帝國書院内に地図・地理普及特別班（以下、普及班）という部署が設立されたことは、冊子「こどもと地図」で何度かご紹介させていただきましたので、すでにご存じの先生方も多いのではないかと存じます。

普及班では、昨年の平成14年1月から3月（平成13年度の3学期）に、全国の小学生を対象に、地図帳に関するアンケート調査を実施いたしました。47都道府県（以下、県と略す。必要な場合は都道府県と表記）全部というわけにはいきませんでしたが、それでも、全国42の都道府県の約140校、約540クラス、約12,000人の子どもたちにご協力いただき、回答を得ることができました。

内容的には、地図帳に対する意識調査と、4～6年の各学年において、各県の名前とその位置をどれほど認知しているかという調査の2本立てで実施いたしました。

そのアンケートを集計し、分析した結果の一例が、左ページにある階級区分図です。

この階級区分図は、全国の小学生の県認知度の高低を表すものです。この場合、認知度が高い県とは、「名前、位置とともにきちんと把握されている」県ということです。この区分図では、赤系統で彩られた県ほど認知度が高いことを示しております。つまり北海道や新潟県、沖縄県などは、全国の子どもたちにその名前と位置を正しく認知されている県といえます。

この冊子は、これらアンケートの分析結果を、報告するために作成いたしました。分析結果の報告だけにとどまらず、結果を踏まえた上での地図指導や県名指導のありかたについても言及しております。

この冊子が、先生方のご指導の一助になれば幸いに存じます。

また、最後になりましたが、このアンケートにご協力いただきました学校の先生方と子どもたちに、この場を借りてお礼申しあげます。ありがとうございました。

平成15年4月

「子どもたちは、今どのような地図指導を求めているか」

—アンケートの分析結果をめぐって—

東京学芸大学名誉教授 次山 信男

小学校（4～6年）の子どもたちが、地図や地図帳について抱えている実態を明らかにしようとする今回の調査は、広範囲から、しかも数多くのサンプルを収集して進められ、子どもと地図、子どもと地図帳、そして、その指導を考える上で多くの示唆を与えてくれるように思います。とりわけ、巷間賑わしている「学力低下論」や「基礎基本論」が、ややもすると子ども抜きで語られることが多い中で、注目すべき調査といえましょう。

以下、この調査のデータや調査者の分析のいくつかをめぐって、調査に現れた実態を、「指導を求める子どもたちの声」と受けとめて、思うところを述べてみることにします。

■「地図帳嫌い」に潜む、指導を求める子どもたちの声

まず、「地図好き」の子どもが、学年を追うごとに10%ダウンすることについて考えてみましょう。

ここで調査者は、全体として「地図好き」（地図帳好き）の子どもが50%を越えるという数値を予想外の好結果ととらえ、この数値に、子どもたちが「地図好き」になる可能性を積極的に見取ろうとしています。しかし、その一方で、4年の段階で62%ある数値が、学年ごとに約10%近くダウンし、6年では41%になるという問題を指摘しています。

「地図好き」の子どもが50%を越えるという数値をどのようにとらえるかは、事前に何を根拠にどの程度の数値を予測していたのかにかかわるのですが、ここでは地図を指導する側や地図を提供する側に、少なからず希望を持たせる数値として受け止めようとしているのです。ですから、それが学年を追うごとに約10%ダウンするという実態は看過できない問題なのです。

この問題を解く鍵の一つは、①「何が書いてあるのかわからない。使い方がわからない…40.9%」、②「探したり、調べたりするのが面倒くさい…32.8%」、③「字が小さくて見にくい…21.5%」という、「地図嫌い」、「地図帳嫌い」の子どもたちの声（叫び）に潜んでいるように思われます。もし、そうであ

るならば、①と②は指導の問題、③は編集の問題といえるでしょうか。

■いつでも、どこでも、必要に応じて繰り返される指導を

調査者がいうように、「どのような情報が、どのようななしくみで編集されているのかが理解できるかどうかが、好き嫌いが発生する要因である」のですが、①と②では、「それをいつ、どのように指導するか」ということを、子どもたちから問われているのです。つまり、そのようなことは、多くの教室では地図帳指導の導入時に「地図のなりたちとしくみ（P.5～6）」や「わたしたちの県のようすを調べてみよう（P.7～8）」（いずれも帝国書院『小学生の地図帳』）のページで集中的に指導されているのでしょうか。そうではなく、子どもたちが求めているのは、「いつでも、どこでも、必要に応じて繰り返される指導」のように思うのです。問題解決の過程で子どもたちが「探したり、調べたり」する時こそ、「どのような情報が、どのようななしくみで…」に立ち戻るという、指導の場がひらく少し、「面倒くさい」と子どもたちも、その指導の後押しを受け立上がりるのでないでしょうか。

■3～4年用、5～6年用の地図帳が欲しい

また、子どもたちが手にする教科書類で、地図帳ほど細かな文字や記号で、しかも多くの情報が記載されているものはありません。ですから、③の「字が小さくて見にくい」ことについては、調査者も厳しく受けとめているように、提供する側が子どもたちの立場にたって改善していかなければならない問題でしょう。しかし、4年から6年まで一冊の地図帳で学習しなければならないという発行上の制約（文部科学省）も、子どもたちの「地図嫌い」の一因になっていることも確かなのです。文字の大きさをはじめ、内容・表現も発達段階や学習内容と無縁ではないのです。一日も早くこの制約がとかれ、3～4年用、5～6年用の地図帳が子どもたちの手元に届けられることを期

待したいのです。

■教材研究と活動研究のあり方の見直しを

もう一つの鍵は、教材研究と活動研究のあり方に潜んでいるのではないでしょうか。教室で学ぶ子どもたちの姿には、「地理は地図」、「歴史は年表」というような構えが、あたかもそれが当然であるかのようにみられます。これも日々の指導がそうさせてきているように思われるのです。ここでも、調査者が指摘しているように、歴史的な過程に「地図」を位置づけて地理的なひろがりを考えたり、地理的なひろがりやつながりに「年表」を関係づけて歴史をとらえたりすることを目指すならば、一概に「6年は歴史学習、だから地図は…」ということにはならないはずです。むしろ、自分たちの歴史の学びに必要な地図を求めようとする、本当に「地図好き」の子どもたちが現れてくるのではないでしょうか。

例えば、本調査における「都道府県名」の認知度の場合をみても、環境学習（琵琶湖）に結びつけて「滋賀県」を確かにしていく子どもたち、また、平和学習（原爆ドーム）に結びつけて「広島県」を確かにしていく子どもたちの姿が予想されていますが、その隣にも、この教材研究と活動研究を相互に間連させた指導がみえてくるのです。指導の目標を吟味しつつ教材の内容や構成などを探る教材研究と同時に、子どもたちの動きを想定しながら活動の内容や設定方法などを探る活動研究を、相互に間連させながら深めていくことが求められているように思うのです。

■「教室から家庭へ」、「家庭から教室へ」の双方向から

次に、子どもたちの家庭における地図帳活用の実態から、地図指導をめぐる問題を考えてみたいと思います。

ここでも、調査者は、家庭で地図帳を活用すると回答した子どもが全体の50%であったことを予想外の好結果ととらえています。この数値は「地図好き」、「地図帳好き」の数値と全く重なるだけでなく、内容的にも「地図好き」、「地図帳好き」な子どもと、家庭において地図帳を活用する子どもとの重なり（「大好き…80%」、「好き…65%」）がみられるのです。これを調査者は当然のように教室での指導の成果であり、「教室の指導をますます充実させていくことにより、家庭でも自発的に地図帳を開く力を…」と指摘しています。

しかし、次のような子どもたちの家庭での地図帳活用の実態

からは、「教室から家庭へ」と同時に、「家庭から教室へ」という指導に求めるメッセージもみえてくるのです。ここでは「宿題や予習・復習のため…22.5%」はともかくとして、「遊びや旅行に行くときの場所確認…24.3%」、「興味のある地域の場所や産物などを調べる…21.9%」、「TVや新聞ででてきた地名を探す…13.2%」など、生活や楽しみに密着した活用の姿がみられます。つまり、「これを「教室での学び」に積極的に活用していこう」という子どもたちからのメッセージです。これは「地図帳嫌い」と回答した子どもの中にも、わずかであるが家庭でも活用している実態があるということとも深くかかわっているのです。ここでは調査者も「この事実を根気よく掘り起こしていくことによって、地図帳が好きになる指導の手がかりがつかめるのではないか」と指摘しているのです。

地図帳を取り巻く子どもたちの生活には、地図帳を辞書や辞典・事典、時刻表などと同列にした活用や、日常の情報伝達の手段（コミュニケーション・ツール）とする実態がみられます。それは各家庭によってさまざまなのですが、それ故に、その実態を「教室での学び」に取り込んでいくという指導の積極さが求められているように思うのです。

■国語のノートに地図を描く子どもたち

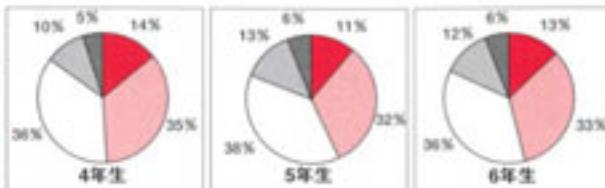
それは、教室での地図帳の活用を、社会科以外の教科や領域へ広げていく契機にもなるのではないでしょうか。最後に、私の経験を一つ挙げて、話を締めくくりたいと思います。

附属小学校の校長をしていた時のことです。5年生の教室で国語の読解の研究授業が進められていました。教科書にある「紅鯉」という作品（丘修三作）を深く読んでいくという学習です。子どもたちは、川の中にいる見えない鯉を追っていく主人公の気持ちの変化を読み取るのに、ずいぶん手間取っていました。授業後の研究会で「川の中にいる見えない鯉を追っていく場面を地図に描いてみてはどうだろう」と提案してみました。町外れ、用水路、せき、たんぼ、町中、川、支流…という場面を地図に描いてその状況をつかんでみるわけです。そうすることによって主人公の動きが地図の広がりの中で、しかも場面に即してイメージされるのではないかと思ったからです。翌日の教室では、文章に即して国語のノートに地図を描いて考えていく子どもたちの姿がみられたのです。

☆子どもたちは、社会科や地図帳を好きなのか？嫌いなのか？

質問 社会科は好きですか？ 嫌いですか？

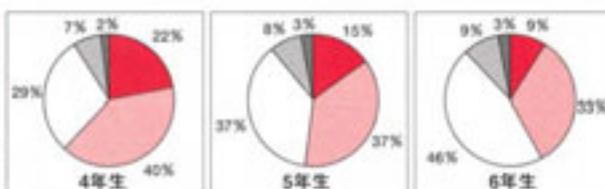
		①大好き	②好き	③どちらでもない	④嫌い	⑤大嫌い	統計
全体	数	1,505	4,140	4,593	1,462	653	12,353
	%	12.2%	33.5%	37.2%	11.8%	5.3%	100.0%
4年	数	541	1,410	1,447	415	184	3,997
	%	13.5%	35.3%	36.2%	10.4%	4.6%	100.0%
5年	数	483	1,472	1,763	577	259	4,554
	%	10.6%	32.3%	38.7%	12.7%	5.7%	100.0%
6年	数	481	1,258	1,383	470	210	3,802
	%	12.7%	33.1%	36.4%	12.4%	5.5%	100.0%



質問 社会科は好きですか？ 嫌いですか？

質問 地図帳は好きですか？ 嫌いですか？

		①大好き	②好き	③どちらでもない	④嫌い	⑤大嫌い	統計
全体	数	1,871	4,530	4,659	975	317	12,352
	%	15.1%	36.7%	37.7%	7.9%	2.6%	100.0%
4年	数	883	1,586	1,167	278	84	3,998
	%	22.1%	39.7%	29.2%	7.0%	2.1%	100.0%
5年	数	664	1,699	1,699	362	132	4,556
	%	14.6%	37.3%	37.3%	7.9%	2.9%	100.0%
6年	数	324	1,245	1,793	335	101	3,798
	%	8.5%	32.8%	47.2%	8.8%	2.7%	100.0%



質問 地図帳は好きですか？ 嫌いですか？

■子どもたちは地図帳がお好き？

上の図表が示すとおり、社会科、地図帳とも「好き」が「嫌い」を大きく上回った。社会科と地図帳の比較では「社会科好き」よりも「地図帳好き」の子どもが多いことがわかる。また、逆に「地図嫌い」よりも「社会科嫌い」が多いことも明らかになった。

ただ、学年別に見てみると、「社会科好き」は学年による数値の変動が小さいのに対し、「地図好き」は学年が進むにつれてはっきりと減少している。4年の段階では「地図好き」は62%で「社会科好き」(49%)に大きく水をあけているが、「地図好き」は学年ごとに約10%近くダウンし、6年になると、「地図好き」は41%となり、「社会科好き」(46%)に逆転されている。

「地図好き」が減る分「どちらでもない」が増えていることが、図表から読みとることができる。

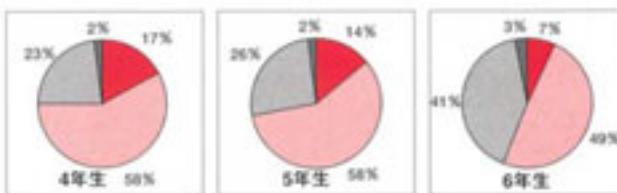
これは、学習内容との関係で、地図帳が6年になってからはあまり使われなくなることと無関係ではないであろう。また、地図帳への興味・関心を維持させられるような、基礎・基本をおさえた指導が十分になされているかどうかということにも関係があるだろう。

しかし「地図好き」が平均で50%を越えたことは意外であり、嬉しくもあった。普及班としては、4年時に60%いる「地図好き」の子どもをさらに増やし、それを維持できるよう、楽しみながら地図の基礎・基本を身につけていくる指導法を研究し、普及させていきたい。

☆子どもたちは、地図帳を活用してくれているのだろうか？ それとも・・・。

質問 学校で地図帳を使いますか？

		①よく使う	②時々使う	③ほとんど使わない	④全く使わない	総計
全体	数	1,603	6,790	3,670	289	12,352
	%	13.0%	55.0%	29.7%	2.3%	100.0%
4年	数	675	2,327	913	81	3,996
	%	16.9%	58.2%	22.8%	2.0%	100.0%
5年	数	658	2,616	1,188	91	4,553
	%	14.5%	57.5%	26.1%	2.0%	100.0%
6年	数	270	1,847	1,569	117	3,803
	%	7.1%	48.6%	41.3%	3.1%	100.0%



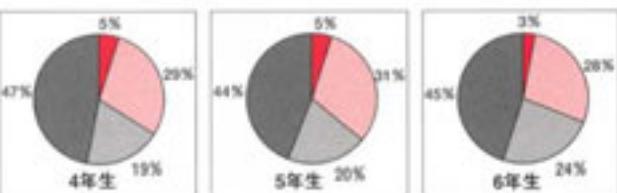
質問 学校で地図帳を使いますか？

凡例

■よく使う ■時々使う
■ほとんど使わない ■全く使わない

質問 家庭で地図帳を使いますか？

		①よく使う	②時々使う	③ほとんど使わない	④全く使わない	総計
全体	数	539	3,635	2,577	5,590	12,341
	%	4.4%	29.5%	20.9%	45.3%	100.0%
4年	数	206	1,170	758	1,857	3,991
	%	5.2%	29.3%	19.0%	46.5%	100.0%
5年	数	214	1,420	922	1,994	4,550
	%	4.7%	31.2%	20.3%	43.8%	100.0%
6年	数	119	1,045	897	1,739	3,800
	%	3.1%	27.5%	23.6%	45.8%	100.0%



質問 家庭で地図帳を使いますか？

■地図帳使ってますか？

学校での地図帳活用に関しては「時々使う」が過半数を超えた。次いで「ほとんど使わない」、「よく使う」、「全く使わない」と続く。「全く使わない」は2～3%程度であり、少なくともある程度の活用はしていただいているようである。

注目すべきは6年生での活用度である。5年生と比べて「よく使う」と「時々使う」あわせて15%もダウンしており、6年生での地図使用頻度が極端に落ちることを物語っている。

確かに歴史的学習の分野では、地図帳は使いにくい教材なのかもしれない。しかし、教科書に載っている小さな位置図ですませてしまうより、地図帳を開いて確認させたほうが、より具体的な位置をつかめるだけでなく、他地域との位置関係やつながりまで見えてくる。その分、より地理的なひろがりの中で歴

史の学習が深まるのではなかろうか。歴史的な学習においても、是非とも地図帳を活用していただきたいと思う。

一方、家庭での地図帳活用については、「全く使わない」が約半数を占め、「ほとんど使わない」とあわせると約70%の子どもは、家庭ではほとんど活用していないという結果が出た。家庭での地図帳活用に関しては、学年による差はほとんどなかった。

*このアンケート内容では、「時々使う」と「ほとんど使わない」の境界が明確でなく、この2つの境界が子どもたちの感覚に依るものになってしまっている。従って、やや確定性にかける数字になっている可能性があることは否めない。

☆子どもたちはなぜ、地図帳が好きなのか？嫌いなのか？

■地図帳を好きな子どもたちの気持ち

地図帳を好きな理由（1,000名ランダム抽出）

- ①いろいろな地域・場所のことがわかる
・・・ 370名（37.0%）
- ②いろいろな情報が載っていて楽しい
・・・ 356名（35.6%）
- ③県名等を覚えたり、調べたりするのが楽しい
・・・ 170名（17.0%）
- ④競争やゲーム等で楽しく学べる
・・・ 73名（7.3%）
- ⑤いろいろと覚えるのが好き
・・・ 27名（2.7%）
- ・その他（少数意見・無回答など）
・・・ 4名（0.4%）

※地図帳を好きと回答した子どもは、6,401名
そのうちの1,000名分の意見を集約
よって上記は、全体の15.6%分の意見

アンケート結果を見ると、地図帳を好きな子どもたちは、地図帳に盛り込まれた多くの情報を前向きにとらえ、そこから知識を得たり、想像することができることを楽しみ、喜びとしていることがわかる。

一方、地図帳を嫌いな子どもたちは、地図帳の情報量を好意的にとらえていない場合が多いといえよう。「情報が多くてどのように地図を見ればいいかわからない」、そして「わからぬから嫌い」になるという、嫌いになるプロセスが見えてくる。

このように「大量の情報が盛り込まれている地図帳」を、その情報を活用して好きになる子どももいれば、一方では、それを読みとれずに嫌いになる子どもがいる。

つまり、どのような情報が、どのようなしくみで編集されているのかを、理解できるかどうかが、地図帳に好き嫌いが発生する大きな原因の一つであるといえる。しかし、裏を返せば、それが理解できれば、地図帳を好きになれる可能性があるとい

■地図帳嫌いの子どもたちの叫び

地図帳を嫌いな理由（1,000名ランダム抽出）

- ①何が書いてあるのかわからない・使い方がわからない・見つけられない
・・・ 409名（40.9%）
- ②探したり、調べるのが面倒くさい
・・・ 328名（32.8%）
- ③字が小さくて、見にくい
・・・ 215名（21.5%）
- ④社会科が嫌いだから、地図帳も嫌い
・・・ 23名（2.3%）
- ⑤なんとなく嫌い
・・・ 17名（1.7%）
- ・その他（少数意見・無回答など）
・・・ 8名（0.8%）

※地図帳を嫌いと回答した子どもは、1,292名
そのうちの1,000名分の意見を集約
よって上記は、全体の77.4%分の意見

うことである。

普及班が実施している地図の出前授業において、授業の最初に地図帳を嫌いといっていた子どもでも、授業において基礎・基本となる地図帳活用法を教えてあげれば、最後には「使い方がわかったから好きになれる」と言ってくれることが少なからずある。このことは何よりも「地図帳を好きになれる可能性」があることを実証しているのではないだろうか。

4年生の一学期に初めて手にした地図帳を見て、子どもたちは多くは、今まで目にしていた教科書とは全くちがう地図帳に少なからず興味を示すはずである。そして、そのような子どもは「どのように使うのかな」と関心を持ち、地図帳の指導を期待するのではないだろうか。

そのような子どもたちの思いに応えられる地図指導をおこなっていく必要があるだろうし、普及班でも、その具体的かつ効果的な指導法について継続的に研究していきたい。

ただ、地図帳嫌いの原因の20%強を「文字が小さくて見にくくから」が占めていることに、地図帳メーカーとして注目しなければならない。地図帳自体の見やすさ、わかりやすさに向けて、改善していかなければならぬ点であり、さらに研究を進めていきたい。

しかし、この問題には、発達段階（学年）に応じた地図帳の提供を再度検討する必要があることをも示唆している。

現在の地図帳には、4・5・6年生用の内容を1冊にまとめ

るという制約がある。そのため、その1冊に様々な情報が盛り込まれることになってしまい、必ずしも発達段階にあった内容になっているとは言い難いのが現状である（例えば、4年生用の国語教科書と、6年生用の国語教科書の内容レベルが、同じであればどうなるであろうか）。

この点は、国の教科書供給制度とも関わるため、メーカーの一存で解決できる問題ではないが、よりよい地図指導を進めていくためには、発達段階に応じた地図帳の作成と提供が必要不可欠であろう。

☆子どもたちは、家庭ではどのような目的で地図帳を活用しているのか？

■家ではどのように使っているんだよ

家庭で地図帳を使う目的（1,000名ランダム抽出）

- ①遊びや旅行へ行くときの場所確認に使う
・・・ 243名（24.3%）
- ②宿題や予習・復習のために使う
・・・ 225名（22.5%）
- ③興味のある地域の場所や特産物などを調べる
・・・ 219名（21.9%）
- ④TVや新聞で出てきた地名を探す
・・・ 132名（13.2%）
- ⑤友達や家族とのクイズに使う
・・・ 112名（11.2%）
- ・友達や親戚の住んでいる場所を確認
・・・ 36名（3.6%）
- ・おもしろいから暇つぶしに見る
・・・ 24名（2.4%）
- ・その他（統計を見る・国旗を見るなど）
・・・ 9名（0.9%）

*家庭で地図を使うと回答した子どもは、6,751名

そのうちの1,000名分の意見を集約

よって上記は、全体の14.8%分の意見

程度の多い少ないは別として、家庭で地図帳を活用すると答えた子どもは、全体の50%強であった（ほとんど使ったことがないという回答を除くと30%強）。この50%強（30%強）という数字は、普及率の予想以上に高い数字であった。

宿題や予習・復習での活用はともかく、旅行の際や、テレビや新聞で出てきたり、興味のある地名や地域を調べるために、地図帳を活用してくれている子どもたちが少なからずいることは、非常に喜ばしいことである。

14年度実施の指導要領の解説書社会編に、教科用図書の地図（つまり地図帳）の活用と指導に関する留意点が、129ページから132ページにわたって示されている。その中に「社会科だけではなく他の教科等の学習や家庭などにおいても活用することが大切であることを指導するようにする」という一文があり（『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版、平成11年）、指導要領においても、家庭での地図帳活用を指導すべきであるとの見解が示されている。

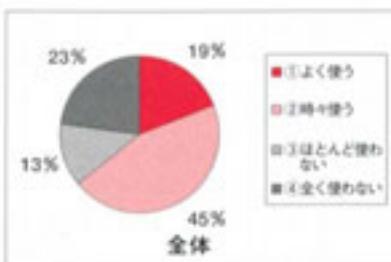
したがって、ここでも地図帳の便利さや有用性を児童が十分に理解した上で、家庭でも自発的に地図帳を開くことができる力を身につけていくことが期待されている。

学校において適切な地図指導がなされ、より多くの子どもたちに地図帳の楽しさや便利さを認知してもらい、その活用を日常生活にまでひろげてもらえば幸いである。

☆地図帳を好きな子どもと、嫌いな子ども。家庭での地図活用状況は？

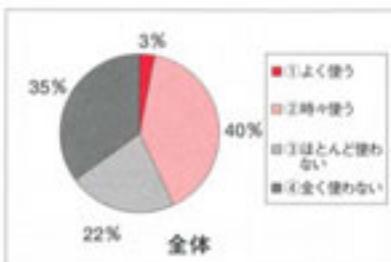
地図帳を見るのが「①大好き」と答えた子どもの家庭での活用頻度

	4年生	5年生	6年生	
①よく使う	152	17.3%	130	19.7%
②時々使う	368	41.9%	313	47.4%
③ほとんど使わない	117	13.3%	85	12.9%
④全く使わない	241	27.4%	133	20.1%
合計	878	100.0%	661	100.0%
	328	100.0%	62	18.9%



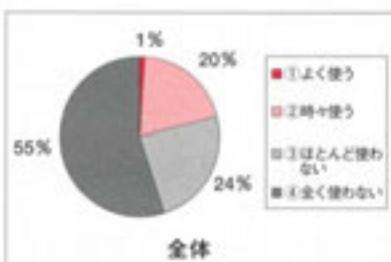
地図帳を見るのが「②好き」と答えた子どもの家庭での活用頻度

	4年生	5年生	6年生	
①よく使う	41	2.6%	65	3.8%
②時々使う	572	36.1%	680	40.1%
③ほとんど使わない	328	20.7%	345	20.3%
④全く使わない	642	40.6%	606	35.7%
合計	1583	100.0%	1696	100.0%
	1141	100.0%	301	26.3%



地図帳を見るのが「③どちらでもない」と答えた子どもの家庭での活用頻度

	4年生	5年生	6年生	
①よく使う	8	0.7%	13	0.8%
②時々使う	199	17.1%	382	22.5%
③ほとんど使わない	256	22.0%	414	24.4%
④全く使わない	703	60.3%	888	52.3%
合計	1166	100.0%	1697	100.0%
	1,789	100.0%	964	53.9%



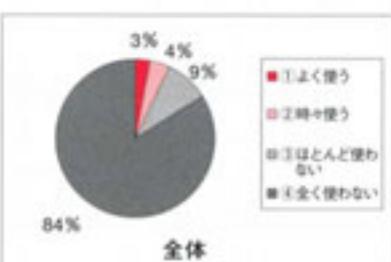
地図帳を見るのが「④嫌い」と答えた子どもの家庭での活用頻度

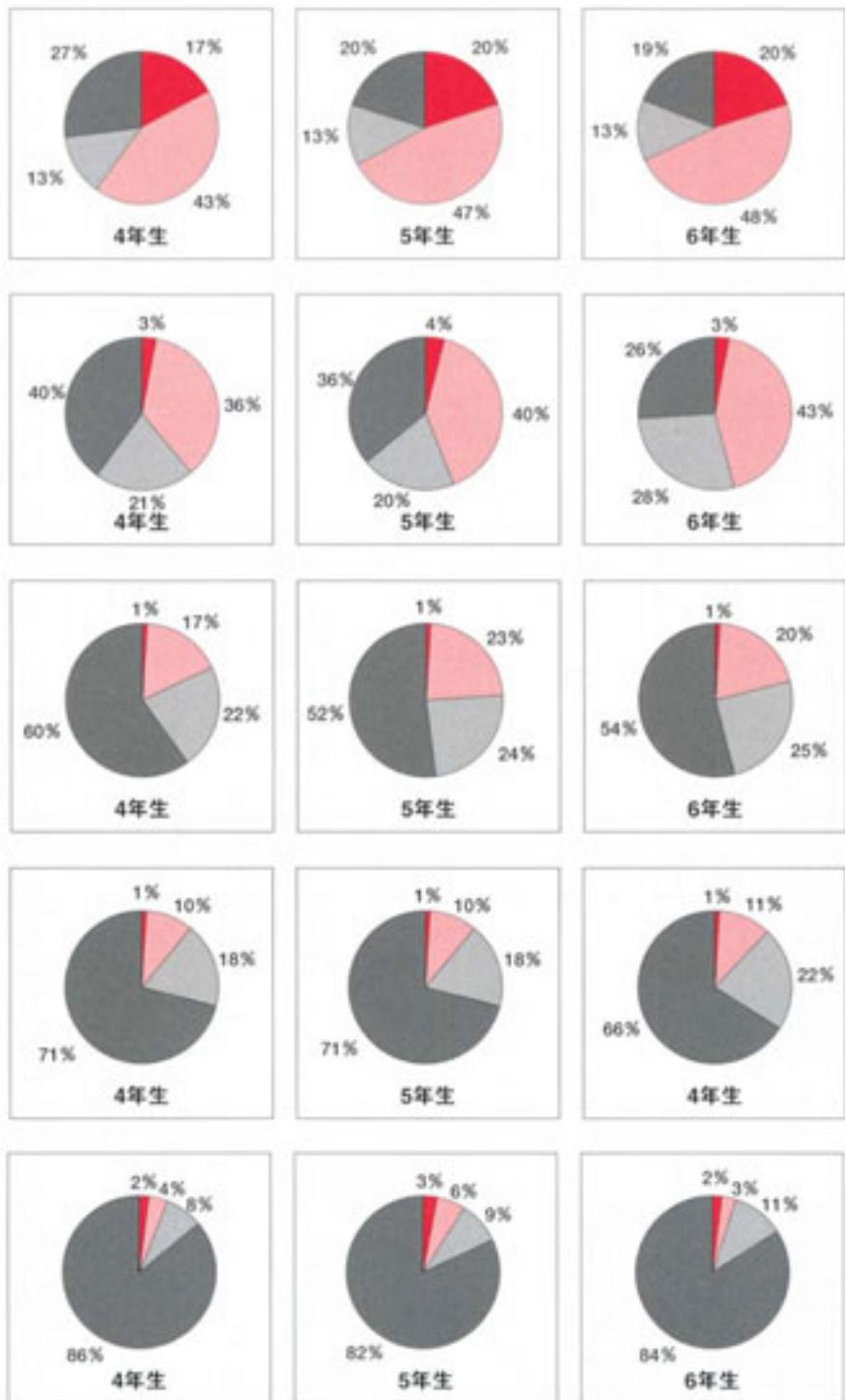
	4年生	5年生	6年生	
①よく使う	3	1.1%	2	0.6%
②時々使う	28	10.1%	36	10.0%
③ほとんど使わない	49	17.6%	66	18.3%
④全く使わない	198	71.2%	257	71.2%
合計	278	100.0%	361	100.0%
	335	100.0%	222	66.3%



地図帳を見るのが「⑤大嫌い」と答えた子どもの家庭での活用頻度

	4年生	5年生	6年生	
①よく使う	2	2.4%	4	3.1%
②時々使う	3	3.6%	8	6.1%
③ほとんど使わない	7	8.3%	12	9.2%
④全く使わない	72	85.7%	107	81.7%
合計	84	100.0%	131	100.0%
	101	100.0%	85	84.2%





前のページでは、家庭においてどのような目的で地図帳を活用しているのかを明らかにしたが、このページでは地図帳の好き嫌いによって、家庭での活用度にどのように違いがあるのかを、分析してみた。

結果は、非常にはっきりした数字になって現れた。円グラフを見ると、「地図帳大好き」、「好き」、「どちらでもない」、「嫌い」、「大嫌い」の順に、家庭で地図帳を活用する、または、活用したことのある子どもの割合が減っていく様子がよくわかる。

「大好き」、「好き」と答えた子どもは、家庭での地図帳活用経験者が多い。「大好き」と答えた子どものうち約80%が、「好き」と答えた子どものうち約65%が、程度は別として家庭において地図帳を使ったことがあると回答している。また、少しづつではあるが、学年が進むにつれて活用経験者が増えている。

一方、**「嫌い」、「大嫌い」と回答した子どもの家庭での地図帳活用経験者は、「大好き」、「好き」と答えた子どもの半分にも満たない。**

このことは、当然といえば当然であろう。誰しも、嫌いなものを家に帰ってからも使おうという気には、なかなかかなれないだろう。

しかし、**「大嫌い」、「嫌い」と回答した子どもたちの中に、わずかでも家庭での地図活用経験者がいる。**この事実を根気よく掘り起こしていくことによって、地図帳を好きになれる指導の手がかりがつかめるのではないかだろうか。

それは、この調査の結果が雄弁に語ってくれているように思うのである。

☆各県の正答率（認知度）

子どもたちは、どの県をよく認知しているのか？

県名	(1)Max正答率		4年の正答率		5年の正答率		6年の正答率		(2)Max正答-Min率差(%)			
	正答率(%)	順位	正答率(%)	順位	正答率(%)	順位	前年差(%)	正答率(%)	順位	前年差(%)		
北海道	99.1	1	93.1	1	99.1	1	6.0	99.0	1	-0.1	6.0	47
沖縄	93.8	2	69.4	2	92.7	2	23.3	93.8	2	1.1	24.5	2
青森	89.4	3	68.8	3	89.4	3	20.6	87.7	3	-1.7	20.6	4
新潟	64.5	4	36.7	7	64.5	4	27.8	62.0	5	-2.6	27.8	1
岩手	63.9	5	44.8	4	63.9	5	19.1	57.2	6	-6.7	19.1	8
東京	63.3	6	44.6	5	61.9	6	17.3	63.3	4	1.3	18.7	9
秋田	59.3	7	42.2	6	59.3	7	17.1	55.3	7	-4.0	17.1	11
千葉	55.6	8	34.6	8	55.6	8	21.0	54.6	8	-1.0	21.0	3
鹿児島	53.9	9	33.4	9	53.9	9	20.5	50.4	11	-3.5	20.5	5
大阪	50.8	10	31.3	10	47.8	10	16.5	50.8	9	3.0	19.5	7
石川	50.6	11	31.0	11	46.6	12	15.6	50.6	10	4.0	19.6	6
長野	47.1	12	30.5	14	47.1	11	16.6	46.3	12	-0.8	16.6	13
宮城	43.3	13	30.9	12	43.3	13	12.5	37.4	20	-5.9	12.5	27
山口	42.2	14	25.7	18	37.9	22	12.2	42.2	13	4.3	16.5	14
福島	41.9	15	30.7	13	41.9	14	11.2	38.0	17	-3.9	11.2	32
滋賀	40.9	16	23.4	27	38.6	20	15.2	40.9	14	2.3	17.6	10
山形	40.8	17	27.4	16	40.8	15	13.4	32.3	33	-8.5	13.4	21
熊本	40.3	18	24.4	22	40.3	16	15.9	33.4	28	-6.9	15.9	16
広島	40.2	19	23.5	26	37.9	21	14.4	40.2	15	2.3	16.7	12
茨城	39.8	20	23.6	25	39.8	17	16.1	36.0	21	-3.8	16.1	15
埼玉	39.1	21	28.1	15	39.1	18	10.9	38.2	16	-0.9	10.9	35
鳥取	38.8	22	24.3	23	38.8	19	14.5	34.6	24	-4.2	14.5	17
高知	38.0	23	26.6	17	35.4	27	8.8	38.0	17	2.6	11.4	29
京都	37.9	24	24.9	20	37.1	23	12.2	37.9	19	0.8	12.9	26
神奈川	36.3	25	23.1	28	36.3	24	13.2	35.7	22	-0.6	13.2	23
静岡	36.2	26	22.2	33	36.2	25	14.0	34.5	25	-1.6	14.0	19
愛知	35.5	27	21.5	35	35.5	26	14.0	30.6	37	-4.9	14.0	18
長崎	35.4	28	25.3	19	35.3	28	10.0	35.4	23	0.1	10.1	40
群馬	34.5	29	21.4	36	34.5	29	13.1	29.4	38	-5.1	13.1	24
兵庫	34.3	30	23.1	28	33.5	32	10.4	34.3	26	0.9	11.3	30
福岡	34.3	30	23.1	28	33.4	33	10.3	34.3	26	0.9	11.3	30
香川	33.9	32	22.9	31	33.9	30	11.0	32.8	30	-1.1	11.0	34
大分	33.9	32	24.5	21	33.9	30	9.4	32.5	32	-1.4	9.4	43
富山	33.3	34	19.9	41	33.3	34	13.4	28.6	39	-4.7	13.4	22
岡山	32.9	35	19.3	43	30.5	42	11.2	32.9	29	2.4	13.6	20
愛媛	32.7	36	24.1	24	32.7	35	8.6	30.8	36	-1.9	8.6	46
和歌山	32.6	37	19.5	42	32.1	38	12.6	32.6	31	0.5	13.1	25
栃木	32.4	38	22.7	32	32.4	36	9.7	30.9	35	-1.5	9.7	41
宮崎	32.4	38	21.4	36	32.4	36	11.0	27.4	43	-5.0	11.0	33
岐阜	31.1	40	20.1	39	31.1	39	10.9	25.5	45	-5.5	10.9	36
奈良	31.1	40	20.1	39	29.9	43	9.8	31.1	34	1.1	10.9	36
三重	30.8	42	18.7	44	30.8	40	12.1	27.5	42	-3.3	12.1	28
徳島	30.6	43	21.9	34	30.6	41	8.7	28.1	41	-2.6	8.7	45
佐賀	29.5	44	20.4	38	29.5	44	9.1	26.0	44	-3.5	9.1	44
島根	29.1	45	18.3	45	29.1	45	10.8	28.6	39	-0.5	10.8	39
山梨	28.9	46	18.1	46	28.9	46	10.8	24.1	46	-4.8	10.8	38
福井	27.6	47	17.9	47	27.6	47	9.7	23.1	47	-4.5	9.7	42

県名	③自県正答率(%)			④正答数合計		⑤誤答数合計		⑥無回答数合計	
	4年	5年	6年	正答数	順位	誤答数	順位	無回答数	順位
北海道	99.0	98.0		12,107	1	78	1	199	1
沖縄	73.7	91.0	97.0	10,608	2	257	2	1,519	2
青森	100.0	98.0	100.0	10,209	3	540	3	1,635	3
新潟	92.0	94.0	97.0	6,742	6	982	11	4,660	7
岩手	92.0	94.0	99.0	6,862	5	2,450	47	3,072	4
東京	70.0	91.0	91.0	7,164	4	859	7	4,361	6
秋田	97.0	99.0	100.0	6,369	7	2,051	45	3,964	5
千葉	89.0	99.0	97.0	6,148	8	1,133	17	5,103	8
鹿児島	100.0	97.0	99.0	5,934	9	641	4	5,809	10
大分	95.0	97.0	93.0	5,481	10	730	5	6,173	14
石川	93.0	95.0	99.0	5,329	11	1,051	15	6,004	12
長野	100.0	97.0	97.0	5,148	12	1,349	29	5,887	11
宮城	75.0	86.0	96.0	4,709	13	2,242	46	5,433	9
山口	83.0	88.0	99.0	4,557	15	845	6	6,982	22
福島	79.0	89.0	94.0	4,670	14	1,666	41	6,048	13
滋賀				4,163	23	1,138	18	7,083	28
山形	89.0	100.0	91.0	4,151	25	1,691	42	6,542	15
熊本	88.0	94.0	98.0	4,375	16	1,225	23	6,784	18
広島	97.0	91.0	96.0	4,198	20	958	10	7,228	31
茨城	81.0	93.0	86.0	4,156	24	1,308	26	6,920	21
埼玉				4,317	17	1,351	30	6,716	17
鳥取	80.0	98.0	96.0	4,213	18	1,143	19	7,028	24
高知	79.0	95.0	100.0	3,886	31	1,588	40	6,910	20
京都	90.0	80.0	78.0	4,206	19	1,155	20	7,023	23
神奈川		90.0	89.0	3,988	29	1,834	44	6,562	16
静岡	84.0	97.0	97.0	4,174	22	1,159	21	7,051	26
愛知	84.0	94.0	95.0	3,993	28	1,019	13	7,372	34
長崎	79.0	81.0	98.0	4,191	21	1,000	12	7,193	30
群馬	99.0	100.0	94.0	3,650	34	1,400	34	7,334	33
兵庫	82.0	92.0	93.0	4,134	26	1,375	32	6,875	19
福岡	72.0	70.0		3,959	30	1,384	33	7,041	25
香川	70.0	98.0	95.0	3,542	35	1,293	25	7,549	37
大分	81.0	94.0	89.0	4,009	27	1,312	28	7,063	27
富山	88.0	99.0	99.0	3,514	36	1,069	16	7,801	41
岡山		79.0	83.0	3,295	40	1,309	27	7,780	40
愛媛	74.0	92.0	94.0	3,480	37	1,418	35	7,486	36
和歌山	94.0	95.0	100.0	3,404	38	1,034	14	7,946	44
栃木	82.0	88.0	98.0	3,723	32	1,430	36	7,231	32
宮崎	86.0	96.0	83.0	3,670	33	1,555	38	7,159	29
岐阜				3,157	43	1,561	39	7,666	38
奈良	85.0	92.0	94.0	3,305	39	1,183	22	7,896	42
三重	70.0	75.0		3,255	42	908	8	8,221	46
徳島				3,019	45	1,458	37	7,907	43
佐賀				3,272	41	1,372	31	7,740	39
島根	58.0	100.0	90.0	3,152	44	1,760	43	7,472	35
山梨	85.0	97.0	93.0	3,018	46	1,261	24	8,105	45
福井	94.0	97.0	98.0	2,947	47	946	9	8,491	47

■この表に関する注

①Max正答率

各学年を通して、一番高い正答率を示した学年の正答率。県名とその位置が一致した回答を正答としている。正答率が50%の県であれば、半数の子どもがその県の名前と位置を認知していることになる。この数値が高いほど、子どもによる認知度が高い県といえる。

表頭の階級区分団は、このデータによる。

②Max正答(率) - Min(正答率)

一番正答率が高い学年の数字から、一番正答率が低い学年の数字を引いたもの。この数値が大きい県ほど、学年による認知度の上昇が大きい。

③自県正答率

子どもたちが、どれだけ自分の住む県の名前と位置を認知しているかの割合。表中の斜線部は、サンプルが無い県および学年。

④正答数合計

全サンプル中の正答数の合計。正答数が多いほど、認知度が高いことになるが、サンプルが無い県や学年があるため、この数値は基準にしていない（※下記参照）。

⑤誤答数合計 ⑥無回答数合計

全サンプル中の誤答数および無回答数の合計。

※サンプルが無い県や学年があることと、各県のサンプル数に、ばらつきがあることから、それらを補正するため、①と②に関しては、データのランダム抽出と、予測による数値補正をおこなった上で分析した。

①と④の順位比べてみても、補正前と補正後で、大きな順位変動はなかった。

☆地方別県名認知度のちがい

「北海道・
東北地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



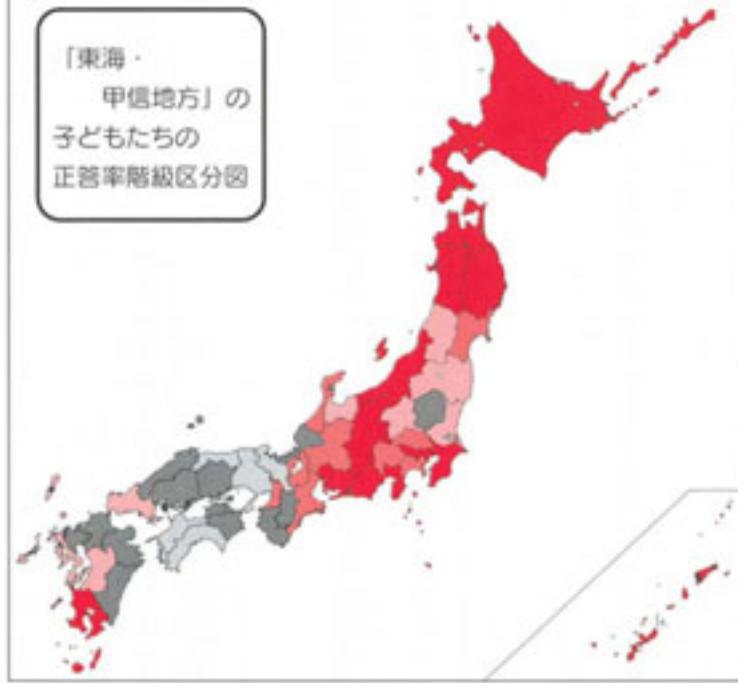
「関東地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



「北陸地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



「東海・
甲信地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



凡
例



50%以上



40%～50%未満



30%未満



30%～35%未満

「近畿地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



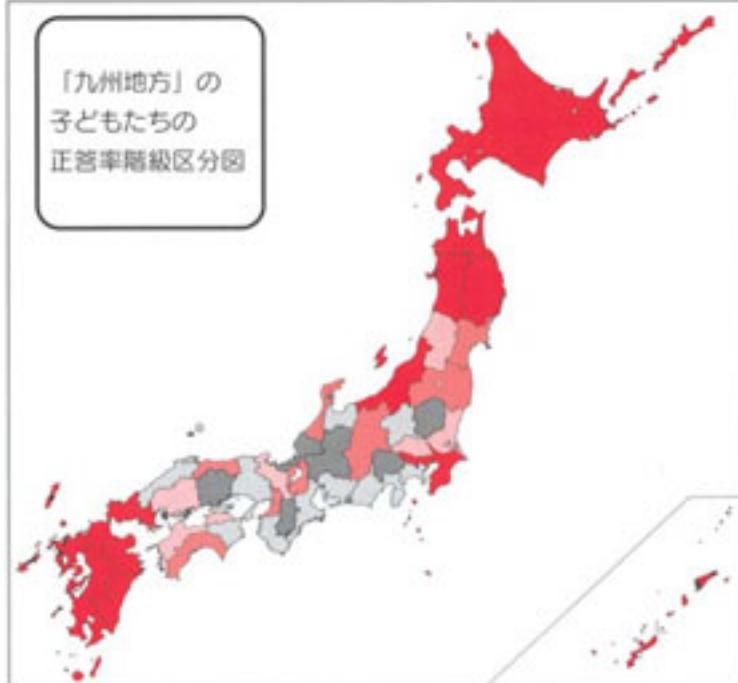
「中国地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



「四国地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



「九州地方」の
子どもたちの
正答率階級区分図



☆子どもたちの県名認知は、どのようになっているか？

■調査・分析の方法

県名認知度の調査では、各県毎に1から47までの番号を記した白地図の横に県名記入用の枠を設けたワークシートを使用した（アンケートの内容については、巻末に掲載している）。県の名前とその所在地が一致している場合を正答とした。ひらがなによる回答でも正答としている。また、明らかに県名を覚えているとみられ、漢字のみを間違えて覚えている場合（例えば、「群馬」を「郡馬」、「大阪」を「大坂」、「鳥取」を「取鳥」と回答している場合など）も正答として扱った。

県名認知度の分析は、各県のサンプルの中から4年生から6年生の各学年で30人ずつ（1県につき計90人）をランダムに抽出しておこなった。よってこの分析は、各学年1,410人、計4,230人を対象としたものになっている。これは全サンプル12,384人のうちの約34%にあたる。

ただし、回答を得られなかった5県（埼玉・岐阜・滋賀・徳島・佐賀）と、サンプルが集まらなかった、神奈川・岡山の4年生分、北海道・三重・福岡の6年生分については、学年別の全国平均数値等から予測正答数（※参照）を割り出し、その数値を上乗せした上で、分析をおこなっている。

この数値修正をおこなった上で、分析結果と、修正前の分析結果において、大きな順位変動はなかった。

※上記の予測正答数は、「自分の住んでいる県」、「自県の隣接県」、「その他の県」の3つに分けて数値を予測している。

例えば、埼玉であれば、「埼玉」および「埼玉に隣接する県」の正答数は、自県正答率および隣接県正答率の全国平均から計算し、「その他の県」に関しては、それぞれの県の全国平均正答率から計算し、それぞれの正答数を積み上げている。

■子どもたちの県名認知の平均

学年毎の平均県名獲得数は、以下のとおりである。

- 4年生…13.6県（29%）
- 5年生…20.0県（42%）
- 6年生…19.2県（41%）

このように、5年生の時点がもっとも県名を習得している。この調査は、平成14年の1月～3月の間に実施したが、5年生の社会科の学習内容（産業学習など）で、県名が多く使われていることが要因と考えられる。

■県名認知度の高い県の特色

県名認知度1・2位は日本の両端にある北海道と沖縄。他の上位にも青森（3位）、岩手（5位）、秋田（7位）、鹿児島（9位）と日本北端・南端、特に北海道から東北地方にかけて認知している様子が読みとれる（東北は17位までに全ての県が入っている）。

東京（6位）と大阪（10位）が上位に入っているのは、やはり日本を代表する大きな都市であり、情報度が高く、子どもたちにも印象が強いためであると考えられる。

また、新潟（4位）、千葉（8位）、石川（11位）、山口（14位）、滋賀（16位）という県が上位に入っているのは、半島や島など、県の形状に目立つ要因があるためと予測される。

■県名認知度の低い県の特色

一方、認知度の低い県は、関東地方より西側の県に集中している。これは北の方から習得していくことに起因するのであろう。また、認知度の低い順に、福井（47位）、山梨（46位）、島根（45位）と続くことをみると、学習内容で取り上げることが少ないために、子どもたちがイメージを持ちにくいのではないかと考えられる。

また、山梨をはじめ、岐阜、奈良（ともに40位）、栃木（38位）など、内陸県の認知度も低い。これは、千葉や石川とは逆に、県の形状や位置の特徴がつかみにくいためと考えられる。

■県名正答率の検証

県名認知度の順位ではなく、県毎の正答率に目を向けてみると、北海道（99%）・沖縄（94%）・青森（89%）までの上位3県以下は急激に落ち、4位の新潟で65%となってしまう。

正答率が50%を越える県は11位の石川までであり、残りの36県（47県中の割合でいうと76%強）は2人に1人が回答できていないということになる。

正答率40%以下の県は27県（47県のうちの57%強）、正答率

が3分の1をきる県は13県（47県のうち27%強）となっている。

■学年毎に認知度が大きく変化する県

学年による認知度順位の変動が激しい県がいくつか見られる。順位差が10位以上ある県は、滋賀・広島・岡山・和歌山（以上4県は上昇）・山形・大分・愛媛（以上3県は下降）・高知（下降から上昇）であるが、その理由は、はっきりとは分からぬ。

しかし、各学年の学習内容との関連によって予測できるものもある。たとえば、滋賀は琵琶湖の環境学習、広島は歴史と平和学習などによって、認知度が上昇するのではないかと考えられる。

また、教科書で取り上げる事例地域のかたよりのため、その差異が出てくるとも考えられる。

■学年毎にみる県毎の正答率の推移

4年生の正答率が50%を越えるのは、北海道・沖縄・青森の3県のみである（特に北海道の93%はダントツ）。大半の県が正答率30%を割り込み、ほとんど団子状態になっている。

5年生になると、どの県の正答率も大きな伸びを示し、県名知識の増大が読みとれる。5年生の社会科の学習内容（産業学習）にあわせて、日本全国の様子を地図上から読みとる機会が増えるため、県名認知も自然とひろがっていくものと思われる。

しかし、6年生になると、過半数の県（32県）で5年生よりも正答率が下がってしまう。6年生の社会科の学習内容は歴史を中心となり、県名認知の機会が少なくなることが原因であると考えられる。

5年生の時に、県名を全て暗記したとしても、6年生になり、しばらく地図から遠ざかってしまうと、子どもたちの頭の中からは、県名はどんどん消えていってしまうのだろう。**算数のかけ算九九は、全て覚えた後に、算数の学習内容で繰り返し活用されているため、暗記した内容が定着していく。しかし、県名は、せっかく覚えてても継続して使う場が用意されていないのだ。**もったいない話である。歴史学習での地図の活用はもちろんのこと、**教室でも、日常生活の中でも、地図を見たり、使ったりする場を積極的につくって、知識を定着させるための工夫が必要になってくるであろう。**

■自分の住んでいる県の認知

4年生の85%以上は、自分達の住んでいる県の名前・位置

について認知している。4年生の社会科学習の内容に、自分達の住んでいる県を調べる項目があるが、その際に、地図上で、自分達の県の位置をきちんと確認しているため、多くの子どもたちが認知しているものと思われる。

自分の住んでいる県の認知度は、学年を追う毎に上昇していく、6年生では94%弱が認知している。

■地方毎に見る県名認知度

子どもたちの住んでいる地方毎に県名認知度の階級区分地図を作成してみると、興味深い事実がうきぼりになってくる。

日本全国、どこに住んでいる子どもたちも、日本の両端（北海道・東北北部と沖縄・鹿児島）を理解していることがまず読みとれる。そして、**自分の住んでいる県を中心として、周りの県については、ある程度押さえられていることも読みとることができる。**

そして、当然のことながら、自分の住んでいる県から遠い地方の県名についての認知は薄いということも読みとれる。

子どもたちの住んでいる地方毎に、認知度の低い地方を挙げてみると以下のようになる。

住んでいる地方	認知度の低い地方
北海道・東北地方	近畿・中四国・九州
関東地方	西日本全般
北陸地方	北関東・中四国・九州
東海・甲信地方	南東北・北関東・西日本
近畿地方	南東北・北関東・四国・九州
中国地方	北関東・中部・四国
四国地方	中部・近畿
九州地方	南東北・北関東・中部・近畿

この点を押さえて、学習内容を検討していくことも考えてみる価値があるのではなかろうか。

また、4年生の時点で、自分達の住んでいる県の認知はかなり進んでいるので、自分の県の学習を行う際には、隣り合う県の名前と位置を確実に認知させていくことも有効であると思われる。

☆地図帳の好き嫌いと、子どもたちの県名認知度の関係は？

地図帳の好き嫌いと県名正答数の関係

総合	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	1,871	15.1%	21.3	45.4%	25.5
地図好き	4,530	36.7%	19.2	40.9%	23.3
どちらでもない	4,659	37.7%	16.7	35.7%	21.0
地図嫌い	975	7.9%	12.8	27.4%	17.0
地図大嫌い	317	2.6%	12.1	25.8%	16.6
	12,352				

社会科の好き嫌いと県名正答数の関係

総合	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	1,505	12.2%	23.2	49.3%	27.1
社会好き	4,140	33.5%	18.9	40.2%	23.1
どちらでもない	4,593	37.2%	16.6	35.4%	20.7
社会嫌い	1,462	11.8%	15.8	33.7%	20.1
社会大嫌い	653	5.3%	13.8	29.4%	18.2
	12,353				

4年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	882	22.1%	16.9	35.9%	20.6
地図好き	1,586	39.7%	14.1	30.0%	17.4
どちらでもない	1,167	29.2%	10.8	23.0%	14.0
地図嫌い	278	7.0%	7.7	16.4%	10.9
地図大嫌い	84	2.1%	6.8	14.4%	11.1
	3,997				

4年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	541	13.5%	18.5	39.2%	22.1
社会好き	1,410	35.3%	13.7	29.2%	17.1
どちらでもない	1,447	36.2%	12.1	25.8%	15.2
社会嫌い	415	10.4%	10.2	21.7%	13.8
社会大嫌い	184	4.6%	8.1	17.3%	12.2
	3,997				

5年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	664	14.6%	26.2	55.8%	30.5
地図好き	1,699	37.3%	22.3	47.4%	26.6
どちらでもない	1,699	37.3%	19.1	40.7%	23.6
地図嫌い	362	7.9%	15.4	32.8%	19.9
地図大嫌い	132	2.9%	14.2	30.1%	18.4
	4,556				

5年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	483	10.6%	26.8	57.0%	30.6
社会好き	1,472	32.3%	22.1	47.0%	26.7
どちらでもない	1,763	38.7%	19.1	40.7%	23.5
社会嫌い	577	12.7%	19.7	42.1%	24.4
社会大嫌い	259	5.7%	17.9	38.1%	21.9
	4,554				

6年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	325	8.6%	23.4	49.8%	28.3
地図好き	1,245	32.8%	21.6	46.1%	26.4
どちらでもない	1,793	47.2%	18.4	39.2%	23.0
地図嫌い	335	8.8%	14.2	30.6%	19.0
地図大嫌い	101	2.7%	13.9	29.6%	18.8
	3,799				

6年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	481	12.7%	24.8	52.9%	29.3
社会好き	1,258	33.1%	20.9	44.7%	25.8
どちらでもない	1,383	36.4%	18.1	38.6%	22.8
社会嫌い	470	12.4%	16.0	34.1%	20.5
社会大嫌い	210	5.5%	13.8	29.4%	19.0
	3,802				

※ 完全正答数とは、県名と位置名が一致した正答の数。

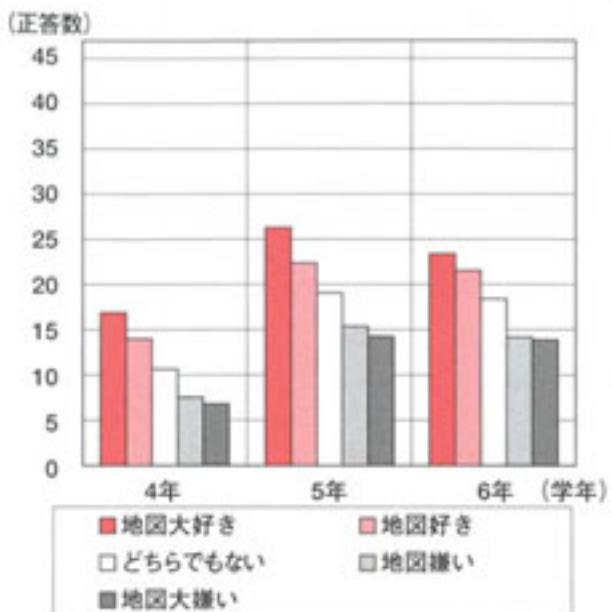
※ 県名回答数とは、完全正答数に、県名のみの正答も加えた回答の数。

※ 周辺認知度とは、自県とその隣接県の認知度。1～5の5段階で評価。1に近づくほど、認知度が高い。

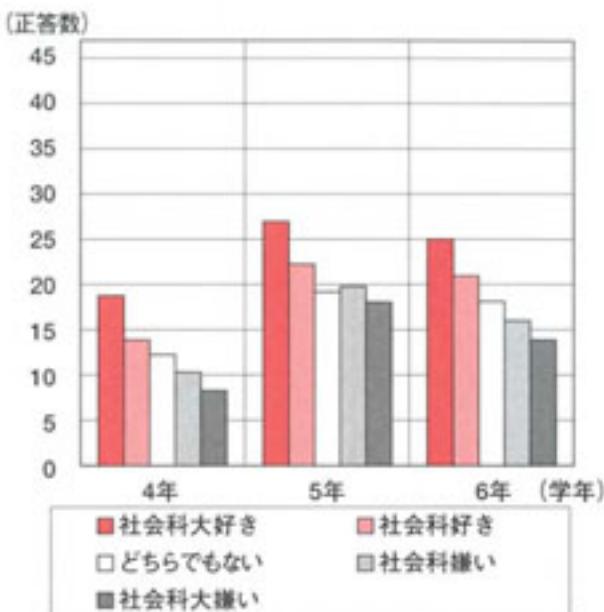
(1:自県および隣接県全てを正答 2:自県を正答、かつ、隣接県のうち2～3県を正答 3:自県を正答、かつ、隣接県のうち1県を正答)

4:自県か、隣接県のうち1つのみ正答 5:自県、隣接県とも正答できず)

地図帳の好き嫌いと県名正答数の関係



社会科の好き嫌いと県名正答数の関係



■地図帳への興味と県名認知度の関係

図表「地図帳の好き嫌いと県名正答数の関係」をみると、各学年ともに地図好きの子どもたちのはうが、より県名の認知度が高いことが、はっきりとわかる。特に4年生の「地図大好き」の子どもたちは、同学年の「地図大嫌い」の子どもたちとくらべて、平均県名正答数に倍以上も開きがあることが分かる。また、6年生の「地図大嫌い」の子どもたちの平均県名正答数は、4年生の「地図大好き」の子どもたちのそれよりも低くなるという結果も出た。

また、図表「社会科の好き嫌いと県名正答数の関係」をみても、上記の結果と同様に、社会科が好きなほど、より県名認知度が高いことがわかる。

「完全（県名）正答数」以外にも、「県名正答数」や「周辺認知度」の数字も、地図好き、社会科好きの子どもたちのはうが、より高い数値を示している。

今回の調査で、47県全ての名前とその位置を正解した子どもは、878人いた。このうちの65%以上の子どもたちが、地図帳を「大好き」、または「好き」と答えている。また、40県以上正解した子どもたち（1,762人）のうち、「大好き」、「好き」と答えた子どもたちは、65%近くになる（全サンプル12,353人のうち、地図帳を「大好き」、「好き」と回答した子どもたちの割合は52%弱である）。

アニメキャラクターの名前（例えば、ポケモンなど）を暗記する能力、テレビゲームの裏技を見つけだす能力など、子どもたちは、大人顔負けの能力を発揮する。これらの例を出すまでもなく、子どもたちは、興味を持つことにはどんどん取り組み、そして吸収していく。県名認知度を高めるためにも、まず、興味を持たせることが、一番の近道なのかもしれない。

☆誤答分析表

どの県と、どの県との間で誤答が発生しやすいのか？

△

県名	調答 総数	調答数 1位			調答数 2位			調答数 3位			調答数 4位			調答数 5位		
		調答	調答数	調答内 占有率	調答	調答数	調答内 占有率	調答	調答数	調答内 占有率	調答	調答数	調答内 占有率	調答	調答数	調答内 占有率
北海道	78	札幌	19	24.4%	青森	9	11.5%	秋田	5	6.4%	福島	3	3.8%	その他	2	2.6%
青森	540	秋田	144	26.7%	岩手	80	14.8%	青山	37	6.9%	札幌	26	4.8%	山形	20	3.7%
岩手	2,450	秋田	1,184	48.3%	青森	273	11.1%	山形	204	8.3%	宮城	169	6.9%	山梨	56	2.3%
宮城	2,242	岩手	386	17.2%	秋田	374	16.7%	山形	371	16.5%	福島	160	7.1%	宮崎	119	5.3%
秋田	2,051	岩手	612	29.8%	山形	457	22.3%	青森	199	9.7%	宮城	174	8.5%	新潟	77	3.8%
山形	1,691	宮城	269	15.9%	秋田	221	13.1%	福島	204	12.1%	岩手	102	6.0%	新潟	89	5.3%
福島	1,666	宮城	180	10.8%	福岡	141	8.5%	山形	131	7.9%	福井	117	7.0%	茨城	100	6.0%
茨城	1,308	栃木	226	17.3%	千葉	144	11.0%	群馬	116	8.9%	宮城	104	8.0%	東京	92	7.0%
栃木	1,430	群馬	364	25.5%	茨城	191	13.4%	埼玉	123	8.6%	山梨	74	5.2%	東京	59	4.1%
群馬	1,400	栃木	218	15.6%	埼玉	145	10.4%	茨城	130	9.3%	山梨	92	6.6%	東京	87	6.2%
埼玉	1,351	東京	306	22.6%	千葉	166	12.3%	群馬	134	9.9%	神奈川	86	6.4%	栃木	73	5.4%
千葉	1,133	東京	331	29.2%	神奈川	138	12.2%	茨城	113	10.0%	埼玉	73	6.4%	静岡	44	3.9%
東京	859	埼玉	233	27.1%	千葉	121	14.1%	神奈川	110	12.8%	京都	70	8.1%	大阪	40	4.7%
神奈川	1,834	東京	502	27.4%	千葉	310	16.9%	埼玉	180	9.8%	横浜	165	9.0%	静岡	63	3.4%
新潟	982	長野	172	17.5%	石川	72	7.3%	鳥取	39	4.0%	秋田	34	3.5%	千葉	31	3.2%
富山	1,069	石川	137	12.8%	福井	126	11.8%	山梨	53	5.0%	長野	44	4.1%	京都	39	3.6%
石川	1,051	富山	156	14.8%	新潟	116	11.0%	福井	70	6.7%	鳥取	55	5.2%	長野	52	4.9%
福井	946	富山	115	12.2%	石川	86	9.1%	福島	64	6.8%	京都	52	5.5%	山梨	43	4.5%
山梨	1,261	埼玉	157	12.5%	東京	113	9.0%	千葉	87	6.9%	神奈川	86	6.8%	愛知	77	6.1%
長野	1,349	東京	214	15.9%	岐阜	134	9.9%	大阪	107	7.9%	長崎	77	5.7%	山梨	68	5.0%
岐阜	1,561	長野	223	14.3%	大阪	148	9.5%	愛知	103	6.6%	京都	98	6.3%	静岡	76	4.9%
静岡	1,159	愛知	149	12.9%	神奈川	132	11.4%	東京	121	10.4%	千葉	104	9.0%	山梨	59	5.1%
愛知	1,019	静岡	150	14.7%	名古屋	86	8.4%	三重	79	7.8%	愛媛	70	6.9%	大阪	63	6.2%
三重	908	和歌山	113	12.4%	奈良	77	8.5%	大阪	72	7.9%	愛知	69	7.6%	京都	62	6.8%
滋賀	1,138	佐賀	153	13.4%	大阪	149	13.1%	京都	143	12.6%	三重	95	8.3%	岐阜	78	6.9%
京都	1,155	大阪	359	31.1%	兵庫	125	10.8%	奈良	124	10.7%	東京	53	4.6%	三重	41	3.5%
大阪	730	京都	192	26.3%	奈良	139	19.0%	東京	52	7.1%	兵庫	38	5.2%	和歌山	27	3.7%
奈良	1,183	大阪	293	24.8%	京都	205	17.3%	三重	128	10.8%	和歌山	83	7.0%	兵庫	60	5.1%
和歌山	1,034	奈良	171	16.5%	大阪	123	11.9%	愛知	110	10.6%	三重	102	9.9%	京都	57	5.5%
兵庫	1,375	大阪	295	21.5%	広島	136	9.9%	岡山	127	9.2%	京都	111	8.1%	鳥取	79	5.7%
鳥取	1,143	鳥根	372	32.5%	広島	130	11.4%	岡山	92	8.0%	京都	74	6.5%	山口	50	4.4%
鳥根	1,260	鳥取	796	45.2%	広島	279	15.9%	山口	121	6.9%	岡山	114	6.5%	福岡	33	1.9%
岡山	1,309	広島	400	30.6%	鳥取	110	8.4%	山口	97	7.4%	鳥根	91	7.0%	兵庫	83	6.3%
広島	958	岡山	179	18.7%	山口	153	16.0%	鳥根	69	7.2%	鳥取	55	5.7%	大阪	48	5.0%
山口	845	広島	240	28.4%	福岡	66	7.8%	岡山	60	7.1%	鳥取	40	4.7%	鳥根	32	3.8%
徳島	1,458	愛媛	354	24.3%	香川	297	20.4%	高知	201	13.8%	愛知	120	8.2%	福島	33	2.3%
香川	1,293	徳島	329	25.4%	愛媛	287	22.2%	高知	133	10.3%	愛知	97	7.5%	神奈川	42	3.2%
愛媛	1,418	高知	360	25.4%	愛知	259	18.3%	徳島	228	16.1%	香川	150	10.6%	広島	33	2.3%
高知	1,588	愛媛	595	37.5%	徳島	241	15.2%	愛知	198	12.5%	香川	96	6.0%	和歌山	40	2.5%
福岡	1,284	佐賀	206	14.9%	大分	201	14.5%	熊本	166	12.0%	長崎	134	9.7%	福島	96	6.9%
佐賀	1,372	長崎	529	38.6%	福岡	176	12.8%	熊本	114	8.3%	大分	89	6.5%	宮崎	61	4.4%
長崎	1,000	佐賀	256	25.6%	鹿児島	165	16.5%	宮崎	92	9.2%	熊本	74	7.4%	福岡	52	5.2%
熊本	1,225	大分	234	19.1%	宮崎	175	14.3%	福岡	150	12.2%	長崎	131	10.7%	鹿児島	115	9.4%
大分	1,312	福岡	295	22.5%	熊本	284	21.6%	宮崎	159	12.1%	佐賀	92	7.0%	長崎	69	5.3%
宮崎	1,555	熊本	477	30.7%	大分	316	20.3%	鹿児島	128	8.2%	長崎	126	8.1%	宮城	118	7.6%
鹿児島	641	熊本	119	18.6%	宮崎	83	12.9%	長崎	59	9.2%	沖縄	46	7.2%	九州	37	5.8%
沖縄	257	那覇	59	23.0%	鹿児島	40	15.6%	九州	20	7.8%	広島	6	2.3%	ハワイ	4	1.6%

…他地方で、かつ、2県以上選ばれた県名調答

調査数 6位			調査数 7位			調査数 8位			調査数 9位			調査数 10位			調査数 5位までの 占有率		県名
調査 数	調査 数	調査内 占有率															
その他	2	2.6%	38	48.7%	北海道												
山梨	15	2.8%	新潟	14	2.6%	千葉	12	2.2%	静岡	10	1.9%	石川	9	1.7%	307	56.9%	青森
石手等	43	1.8%	福島	38	1.6%	新潟	35	1.4%	仙台	25	1.0%	盛岡	23	0.9%	1,886	77.0%	岩手
茨城	98	4.4%	仙台	79	3.5%	山梨	63	2.8%	新木	44	2.0%	青森	41	1.8%	1,410	62.9%	宮城
福島	68	3.3%	山梨	40	2.0%	長野	24	1.2%	盛岡	22	1.1%	群馬	21	1.0%	1,519	74.1%	秋田
山梨	81	4.8%	茨城	54	3.2%	青森	48	2.8%	群馬	46	2.7%	栃木	36	2.1%	885	52.3%	山形
橋本	100	6.0%	東京	87	5.2%	群馬	65	3.9%	長野	55	3.3%	山梨	43	2.6%	669	40.2%	福島
埼玉	59	4.5%	福島	44	3.4%	神奈川	38	2.9%	新潟	32	2.4%	岐阜	26	2.0%	682	52.1%	茨城
千葉	56	3.9%	岐阜	31	2.2%	福島	26	1.8%	長野	26	1.8%	宮城	25	1.7%	811	56.7%	栃木
長野	59	4.2%	千葉	48	3.4%	京都	37	2.6%	大阪	36	2.6%	岐阜	36	2.6%	672	48.0%	群馬
茨城	68	5.0%	山梨	66	4.9%	大阪	43	3.2%	京都	38	2.8%	奈良	29	2.1%	765	56.6%	埼玉
愛知	35	3.1%	横浜	28	2.5%	橋本	26	2.3%	群馬	24	2.1%	大阪	20	1.8%	699	61.7%	千葉
横浜	20	2.3%	静岡	14	1.6%	茨城	12	1.4%	その他	12	1.4%	その他	12	1.4%	574	66.8%	東京
香川	45	2.5%	大阪	40	2.2%	茨城	39	2.1%	山梨	35	1.9%	愛知	34	1.9%	1,220	66.5%	神奈川
群馬	31	3.2%	東京	29	3.0%	長崎	29	3.0%	山形	27	2.7%	その他	27	2.7%	348	35.4%	新潟
福岡	31	2.9%	新潟	31	2.9%	愛知	30	2.8%	大阪	29	2.7%	岐阜	25	2.3%	399	37.3%	富山
金沢	42	4.0%	神奈川	34	3.2%	静岡	27	2.6%	岐阜	23	2.2%	福岡	22	2.1%	449	42.7%	石川
福岡	41	4.3%	愛知	35	3.7%	鳥取	32	3.4%	三重	26	2.7%	岐阜	25	2.6%	360	38.1%	福井
大阪	72	5.7%	静岡	72	5.7%	長野	60	4.8%	群馬	58	4.6%	橋本	39	3.1%	520	41.2%	山梨
静岡	62	4.6%	群馬	54	4.0%	京都	44	3.3%	愛知	41	3.0%	石川	37	2.7%	600	44.5%	長野
山梨	75	4.8%	東京	71	4.5%	兵庫	52	3.3%	三重	51	3.3%	群馬	44	2.8%	648	41.5%	岐阜
三重	57	4.9%	大阪	38	3.3%	和歌山	31	2.7%	埼玉	29	2.5%	岐阜	28	2.4%	565	48.7%	静岡
山梨	51	5.0%	東京	47	4.6%	神奈川	36	3.5%	奈良	34	3.3%	千葉	32	3.1%	448	44.0%	愛知
滋賀	61	6.7%	静岡	55	6.1%	岐阜	31	3.4%	山梨	24	2.6%	千葉	21	2.3%	393	43.3%	三重
奈良	66	5.8%	東京	33	2.9%	兵庫	31	2.7%	愛知	23	2.0%	静岡	20	1.8%	618	54.3%	滋賀
滋賀	37	3.2%	和歌山	27	2.3%	鳥取	23	2.0%	岐阜	21	1.8%	岡山	20	1.7%	702	60.8%	京都
三重	19	2.6%	滋賀	16	2.2%	愛知	16	2.2%	神戸	13	1.8%	神奈川	12	1.6%	448	61.4%	大阪
愛知	44	3.7%	東京	35	3.0%	滋賀	28	2.4%	岐阜	19	1.6%	神奈川	19	1.6%	769	65.0%	奈良
神奈川	44	4.3%	兵庫	43	4.2%	愛媛	38	3.7%	岡山	28	2.7%	静岡	26	2.5%	563	54.4%	和歌山
和歌山	46	3.3%	山口	40	2.9%	福岡	37	2.7%	神戸	34	2.5%	愛知	32	2.3%	748	54.4%	兵庫
大阪	36	3.1%	兵庫	34	3.0%	奈良	25	2.2%	石川	20	1.7%	香川	13	1.1%	718	62.8%	鳥取
長崎	22	1.3%	大阪	20	1.1%	石川	19	1.1%	兵庫	18	1.0%	愛知	18	1.0%	1,343	76.3%	島根
大阪	70	5.3%	福岡	40	3.1%	京都	38	2.9%	愛知	28	2.1%	奈良	19	1.5%	781	59.7%	岡山
福岡	44	4.6%	兵庫	31	3.2%	愛媛	29	3.0%	愛知	27	2.8%	長崎	18	1.9%	504	52.6%	広島
長崎	22	2.6%	兵庫	21	2.5%	熊本	21	2.5%	大分	20	2.4%	鹿児島	20	2.4%	438	51.8%	山口
山口	28	1.9%	神奈川	26	1.8%	岡山	23	1.6%	鳥取	22	1.5%	広島	21	1.4%	1,005	68.9%	徳島
鳥取	25	1.9%	大阪	24	1.9%	岡山	21	1.6%	佐賀	17	1.3%	島根	17	1.3%	888	68.7%	香川
和歌山	22	1.6%	鳥取	21	1.5%	鳥根	18	1.3%	山口	18	1.3%	岡山	18	1.3%	1,030	72.6%	愛媛
鳥取	23	1.4%	鹿児島	22	1.4%	広島	22	1.4%	四国	19	1.2%	鳥根	17	1.1%	1,170	73.7%	高知
宮崎	76	5.5%	鹿児島	45	3.3%	九州	42	3.0%	福井	32	2.3%	広島	31	2.2%	803	58.0%	福岡
鹿児島	52	3.8%	滋賀	40	2.9%	福島	20	1.5%	長野	20	1.5%	広島	18	1.3%	969	70.6%	佐賀
長野	52	5.2%	大分	25	2.5%	滋賀	20	2.0%	九州	16	1.6%	沖縄	15	1.5%	639	63.9%	長崎
佐賀	60	4.9%	九州	22	1.8%	宮城	20	1.6%	熊野	19	1.6%	福島	19	1.6%	805	65.7%	熊本
鹿児島	62	4.7%	福島	29	2.2%	広島	28	2.1%	四山	19	1.4%	山口	16	1.2%	809	68.5%	大分
福岡	77	5.0%	佐賀	34	2.2%	福島	18	1.2%	九州	16	1.0%	広島	14	0.9%	1,165	74.9%	宮崎
福岡	31	4.8%	大分	31	4.8%	佐賀	25	3.9%	広島	13	2.0%	その他	13	2.0%	344	53.7%	鹿児島
淡路	4	1.6%	奄美	3	1.2%	太平洋	3	1.2%	対馬	3	1.2%	大阪	3	1.2%	129	50.2%	沖縄

…県庁所在地名や、地方名など、県名以外の調査

☆子どもたちは、どの県をどの県と誤認しているのだろうか？

■県の誤認には、いくつかのパターンがある

前ページ、見開きの表を見てもわかるとおり、県名と位置に関する誤答は、基本的に隣接・近隣県内の間違いが大半を占める。これは想像に難くない結果であったが、中には、場所や地域が大きく異なる県の名前が挙がっているケースも散見された。

誤答を分析した結果、誤答には以下のように、いくつかのパターンがあることがはっきりした。

- (i) 隣接県と誤認（勘違い）している
- (ii) 同じ漢字が使われている県と誤認している
- (iii) 県庁所在地名と県名を誤認している
- (iv) 地方名と誤認している
- (v) その他・例外

おおよそ、上記の(i)を中心にして、それに(ii)から(iv)のパターンが組み合わさって、各県の誤答を形成している。

以下に、それぞれの誤答パターンについて検証してみる。

○誤答パターン (i)

(i) は、一番多いパターンである。特に隣接する県と誤認しているものがほとんどである。誤答内占有率（各県の誤答数全体の中でその回答が占める割合）が30%を越える県名を挙げると以下のとおりである。

順位	回答すべき県名と回答（正答）と（誤答）	誤答内占有率	その誤答数	その県の総誤答数
①	岩手を秋田と回答	48.3%	1,184	2,450
②	島根を鳥取	45.2%	796	1,760
③	佐賀を長崎	38.6%	529	1,372
④	高知を愛媛	37.5%	595	1,588
⑤	鳥取を島根	32.5%	372	1,143
⑥	京都を大阪	31.1%	359	1,155
⑦	宮崎を熊本	30.7%	477	1,555
⑧	岡山を広島	30.6%	400	1,309

誤答内占有率が高い県（前の表でいうと、秋田や長崎のこと）は、子どもたちの頭のなかに、「(誤答した) A県は、このあたりにある」というイメージが、他の県に比べて、より強く残っているということができる。鳥取県と島根県などは、かなりの子どもが「一方が鳥取であり、残りの一方が島根である」という認知が出来ているのだが、どちらが正しいのかが詰め切れていない状態であることが、この調査からも明らかである。

また、(i)に関する誤答の中でも対照的なのが、本州各県と、四国・九州各県での誤答の違いである。

本州は、他地方の県の誤答が比較的多く混在するのに対し、四国・九州内の各県は、それぞれの地方内の県での誤答がその大半を占める。

四国各県における誤答の大半が、香川・徳島・愛媛・高知の四国4県で占めているのをみればその傾向がよくわかる（ただし、四国の場合は、パターン(ii)の「愛媛」と「愛知」との混同が多いので、実際は四国4県+愛知の5県が誤答の大半を構成している）。つまり、四国・九州は、「一つの大きな島で区切られた地方」として明確に認識されているが、その地方を構成する県の県名となると、認知度が落ちるといえるだろう。

もちろん本州の各県についても、○○地方に所属するという認識はある程度なされているとはいえるが、四国・九州ほどは、子どもたちの頭の中で明確に区分が出来ているとは言い難い。

○誤答パターン (ii)

(ii) は、同じ漢字が使われている県名同士で誤認しているパターンである。パターン(i)のところでも挙げたが、四国地方に「愛知」という回答が多いのは「愛媛」と誤認しているためであり、東北地方に「山梨」の誤答が多いのは、「山形」と誤認しているためであると考えられる。

他にも「宮城」と「宮崎」、「福島」と「福井」と「福岡」、「東京」と「京都」、「神奈川」と「香川」、「滋賀」と「佐賀」、などを誤認している回答が散見される。

また「青森」を「青山」、「岩手」を「石手」・「岩森」など、と誤答する例も少なからず見られた。

なお、漢字の間違いが多かった県が、「大阪」と「鳥取」であり、それを「大坂」・「取鳥」と書く子どもがかなりいた。

ただし、このパターンにあてはまらず、よくわからないこともある。たとえば、東北地方各県に「山梨」という「山形」と誤認した誤答が広く分布しているのに対し、「宮城」を「宮崎」と誤答する子どもも「宮城」以外ではほとんどみられない。

また、「山形」を「山梨」と誤答する子どもも多いが、「山口」と誤答する子どももほとんどいないというように、同じ漢字が使われている県名であっても、誤答にのぼる県とそうでない県にわかれ、などである。

○誤答パターン（iii）

(iii) の誤答パターンは、一部の県でしか見られない。県名と県庁所在地名が異なる県は、47県中17県（さいたま市を含めると18県）であるが、そのうち、誤答内占有率が高く、顕著だったものは「札幌」「横浜」「名古屋」「那覇」の4例のみである。表中には「盛岡」「仙台」「金沢」「神戸」等も顔をのぞかせてはいるが、全体で見ると非常に少数であり、上記の4都市との差は大きい。

これは、**小学校段階において、県庁所在地の指導があまりなされていないことにも関係があると考えられる（小学校段階では、県庁所在地を認知するところまでは求められていないので、問題はない）**。誤答となって顕著に現れた札幌などは、それだけ認知度が高い地名であるといふべきだ。

○誤答パターン（iv）

地方名を回答する(iv) のパターンは、九州地方以外ではほとんどみられない。あってもごく少数であり、前ページの表中で出てくるほどの回答数は出てこなかった。

しかし、九州と同じく、島全体が一つの地方としてくらんでいる四国地方の各県を「四国」と回答したものが皆無に等しいのに、なぜ九州地方の県のみ「九州」という回答が目立つか、原因は不明である。わからないから適当に答えたという側面はあるのかもしれないが。

○誤答パターン（v）

(v) その他の誤答は、はっきりとした原因是不明であるが、推測の範囲で検討してみた。いずれも**子どもたちが持つイメージと密接に結びついていると考えられる**。

・「長野」を「東京」「大阪」と誤答する

→ 長野県が日本のはば真ん中に位置し、しかも巨大で目立

つ県であることが原因ではないか。子どもたちの頭の中に「中央にある=日本の中心都市」というイメージがあるのかもしれない。また、長野のちょうど中央部に、ほぼ丸い形をした諏訪湖が位置し、それを「首都」や「日本の中心」のマークと思いこんだ可能性も考えられる。

・東京周辺を「大阪」、大阪周辺を「東京」と誤答する

→ 日本の2大都市として「東京」「大阪」を知っているが、関東・関西どちらにあるかを混同しているためではないか。子どもたちの頭の中に、東京と大阪の中心性のイメージが偏っていることは、まず間違いないだろう。

・北陸地方の各県（富山を除く）を「鳥取」と誤答する

→ 鳥取に対し「日本海に面した細長い県」というイメージを、子どもたちが強く持っているのかもしれない。

■どのようにして県の誤認を少なくしていくか

「このように指導すれば、確実に認知できる」という特効薬的な指導法は、残念ながら、ない（と思う）。**指導を着実に繰り返し、学習を積み重ねていくほかない**のではなかろうか。

それには、**段階を追う必要があることはいうまでもない**。まず、自分の住む県、そして、隣接する県、自分が住む県と同じ地方にある県、学習で出てきた県、とひろげていく。また、1回認知したとしても、忘れないように、折にふれて思い出させる作業や発問も必要になってくるだろう。

ただ、子どもたちの心理を考えれば、**無理な詰め込みは避けるべき**である。時には、クイズやパズルなど、楽しみながら取り組める工夫があると、拒否反応も少くなり、前向きに取り組もうとする子どもも増えるのではなかろうか。

この調査を通して、子どもたちのウイークポイントや、県名認知の特徴が、少しはあるが、明らかになったと思う。それらに注意して、いっそうきめ細かな指導が展開されることを期待したい。

アンケートからみえる児童の県名知識とその改善ポイント ～イメージづくりと描図の復権を～

愛知教育大学助教授 寺本 濡

1. アンケート結果をどうみるか

①地図帳への興味・関心は意外と高い

「地名・物産の記憶を強いる社会科」などと、いまだに揶揄される方がおられたら、大きな誤認である。現在の小学校社会科の内容構成や問題解決学習のスタイルからいえば、まったくその批判は当たらない。むしろ、わたくしは「行きすぎた問題解決学習」に疑問を抱いているくらいである。「行きすぎた問題解決学習」とは、言い換えれば「できる子」だけの発言で学習課題を設定し、学習内容の多くを「人々の工夫や努力」という道徳的な項目理解に集約しすぎた授業をさしている。そういう社会科授業においては、地図帳は単なる参考資料（特に事象の場所を確かめるだけの資料）にすぎない扱いにとどまっている。さらに、地名を記憶させることに嫌悪感を抱いている教師さえいるから驚きである。

しかし、心ある教師は気づいている。地図帳活用をもっと進める必要があることを。なぜなら、児童の郷土意識や国土像、世界像形成こそ社会科が担うべき、という社会科の責任を感じているからである。今回の小学校地図帳と県名知識に関する児童向けアンケートをみれば、意外と児童は地図帳に好感を抱いていることがわかってくる（約52%の児童が地図帳を好きと回答している）。地図帳を使うことは、確かに面倒くさい面がある。それは、目次や索引から探す手間を避け、すぐにページをめくってしまう姿からも想像できる。しかしそれ以上に、探したい情報が見つかったときや、新しい発見があった場合の驚き、喜びが大きいのも地図帳の魅力であろう。児童は地図帳の面白さに気づいている。問題は授業や生活場面において、地図帳が十分に活用されていないことにあるのではないだろうか。

②都道府県名知識調査結果

白地図を提示して都道府県名を回答させるこの調査は、オーソドックスな調査である。児童は自らの県名知識と地図上の場所を対応させながら、解答しなければならない。あいまいな記憶では対処できない問題である。この種の調査に対し、「小学

校段階で47もの都道府県の位置と名称を正確に覚えていなくてよいではないか」、「必要に応じて地図帳で確かめればよいではないか」、「実生活ではせいぜい自県と隣接県が把握できていれば小学生として十分ではないか」との意見もあるかもしれない。

しかし、である。「日本の国民としての常識」を考えてみれば、小学校段階で都道府県認識を形成できていることは、不可欠な能力といえないだろうか。義務教育段階は確かに中学校も残ってはいるものの、12歳程度の年齢発達段階において自国の構成を理解していることは、アイデンティティの形成の上でも必要である。さらに、中学校での社会科をはじめ、様々な学習や社会生活上の基礎知識としても県名知識は役立つのではないかだろうか。

調査結果はほぼ予想できる結果となっている。たとえば、国土の両端や臨海県、東北地方の各県の正答率が高いのは、從来から指摘されている傾向である。また、5年生の正答率が最も高く、6年生でやや低下する点も理解できる結果である。6年生では地図帳をほとんど使わなくなるからである。誤答傾向も予想の範囲である。ただ、岩手と秋田の誤答（約48%）は予想以上に高かった。さらに、無回答県が福井・三重・山梨を代表とする傾向は、大人の世界においても同様である。これらの県からの情報発信力が高くなないことと、地図上で目立たないことも背景として考えられる。

いずれにせよ、都道府県名知識は、かなり濃淡がある知識であることは間違いない。

2. 県名知識育成に向けての改善ポイント

地図上における都道府県名知識の育成は、次の二つの点をふまえれば改善できるのではないだろうか。また、最後に、暗記させるための順序についてもふれておいた。

①その県のイメージづくり

何といっても、47もの都道府県名とその位置を理解させるには、単純な丸暗記だけでは限界があるだろう。長期記憶として生きて働く学力に定着させるためには、県名だけをいくら地図上で覚えようとしても無理がある。鉛筆片手に白地図上で県名を何度も書いて覚えようとしても、すぐに忘れてしまうに違いない。結局はその県の「イメージつくり」を丹念におこなった方がいい。「青森県＝ねぶた祭り」、「成田空港は千葉県にある」、「九州の真ん中、阿蘇火山のある熊本県」などというように、連想的な事項でむすびついた知識は忘れにくい。カルタを作成させて記憶させたり、都道府県クイズやスゴロクで楽しみながら記憶させていく方法も効果的である。

ただし、一旦記憶させても、まったくふれないでおけば、記憶はどんどんあいまいになっていく。社会科だけでなく、総合的な学習や理科や国語、音楽などでも、地名が登場してきた場合に「この物語の舞台の県は東北地方の東にある県だったね」、「荒城の月」は滝廉太郎という大分県出身の音楽家がつくったんだね」というように、機会をとらえてふれておく配慮が必要になってくる。そのためにも、教室内に日本の白地図（県境が記入されているもの）を常時掲示しておき、様々な教科や活動で話題にあがった地名や県名をそのつどチェックし、地図上に表示させるなどの活動も考えられるだろう。

家庭生活においても同様に、ニュースや観光番組、大河ドラマなどで見聞きするたびに、地図帳で確かめるのも大事なことである。教師が家庭教育に寄与できる一面であろう。

②県の輪郭を描かせる

次に大切な作業は、一度は47都道府県の輪郭を描かせることである。自分の手で輪郭をなぞらせることで、海岸線や県の形が、視覚と手との協応関係で記憶される。県のパズルも面白い（ただ、作成するのに手間がかかりすぎる難点がある）。また、一旦、記憶させた形に動物や物の形を当てはめて記憶させる「疑似法」も有効な記憶法である。たとえば「静岡県は金魚の形に似ているね」などという比喩である。その際「尾びれのあたりが伊豆半島だよ」というように具体的な地名と合わせて記憶させる指導が大切である。

③簡単記憶術

アンケート調査の傾向を参考にすれば、効果的な記憶術が導きだせる。それは、消去法である。

まず、北海道と沖縄県は国土の両端なのですから記憶できる。

次に首都である東京都と天下の台所である大阪府という二大都市を押さえる。これで、43に減る。その次は、最も記憶しやすい東北6県を扱う。これで、37に減る。さらに九州の7県と四国4県を記憶させる。これでさらに26になる。ここからが肝心である。ここからは、児童の住んでいる地方によって記憶されにくいゾーンが異なるので要注意である。つまり、関東地方に住む児童は近畿地方が最も覚えにくく、反対に近畿地方に住む児童は関東地方の県が記憶に残りにくいからである。とりわけ、北関東4県の位置と名称、近畿南部の3県は記憶されにくい。最後に認認されやすい県を確実におさえさせれば、かなり記憶効果は進ってくるはずである。このように目的を絞って扱うことでもプロ教師の技であろう。

3. 地図帳活用単元の特設を

結局、地図を好きにさせたり、県名等を暗記させるためには、地図帳をいかに効果的に使用できるかにかかっている。しかし、これこそが最大の課題であろう。地図帳の使い方が児童に十分に指導されていないからである。社会科という教科の時間の中で地図帳の活用法自体を指導する単元がないのである。学習指導要領においても「(そのつど) 地図その他の統計などを効果的に活用し」と学習場面に応じて使用することが指示されているものの、教師や児童は実際の場面で地図帳に立ち戻って学習するという手間をはぶきがちである。

たとえば、日本の農業を学習させる場合、教科書に載っている事例地域（たとえば庄内平野）や農家の記述だけを読ませ、場所の確認も、教科書に掲載された小さな位置図だけですませている場合が多い。したがって、庄内平野がどのような地形や気候のもとにある平野であるか、周辺の平野や盆地も米生産が盛んである事実など、十分に学習できないままになっている。5年生の学級で何度も目にした光景だが、棚に新品同様のまま地図帳が保管されている実態がある。地図帳そのものを使用できる単元が特設されなければ、この問題はなかなか解消されないだろう。

社会科の基礎・基本としての地図の学力は、地図帳活用から第1歩が始まることを、この調査から改めて感じるのである。

小学生のみなさんへ

毎年 月

みなさんが学校で使っている「地図帳」について質問にこたえてください。

- ・この用紙にこたえを書いてください。うち面もわざれずに書いてください。
- ・番号をえらぶ「質問」は、あてはまる番号を1つえらび、○をつけましょう。
- ・一番上に学年と組をわざれずに書いてください。名前は書かなくていいです。

質問1 社会科は好きですか。

- ①大好き
- ②好き
- ③どちらでもない
- ④きらい
- ⑤大きらい

質問2 学校では地図帳をよく使いますか。

- ①よく使う
- ②ときどき使う
- ③ほとんど使わない
- ④まったく使ったことがない

質問3 地図帳を見るのは、好きですか。きらいですか。

- ①大好き
- ②好き
- ③どちらでもない
- ④きらい
- ⑤大きらい

質問4 どうして地図帳を見るのが好き、または、きらいなのですか。理由を教えてください。

質問5 まで、他者以外の目的で地図帳を使うことはありますか。

- ①よく使う
- ②ときどき使う
- ③ほとんど使わない
- ④まったく使ったことがない

質問6 質問5で、①から③をえらんだ方への質問です。家では、どのような目的で地図帳を使いますか。

(質問5で④をえらんだ方は、こたえなくていいです)

質問7 地図帳で、自分の知らない地名の場所をさがすことができますか。

- ①さがさせる
- ②さがせない

質問8 今まで旅行で行ったことのあるところ(県名や都名)をおぼえているだけ書いてください。

質問9 地図帳について、思っていることを何でも自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

■掲載後記

このアンケート結果をご覧になって、どのようにお感じにならうか。もちろん、お感じになったことは、人それぞれであるかと思います。子どもたちの県名認知度を低いと感じられる先生もいらっしゃるでしょうし、地図や県名の指導に、少し力を入れて取り組もうとお考えになった先生もいらっしゃるでしょう。

県名認知や誤答の傾向に関しては、ある程度は予想通りの結果になりましたが、全国的な傾向を数字で出せたことは、一つの成果であるというふうに考えております。

ただ、これらの結果を、現在騒がれている「学力低下」に結び付けるようなことは避けいただきたいと思いまます。何年か前と比較して、県名認知度が低くなったかどうかを

計るための資料はないのでしょうか。(地図や県名認知度に関する、この規模での調査は、文部省実施の「学力調査」を除けば、初めてだと思います)。一つのデータとして、客観的にとらえていただきたいと思います。

しかし、正直なところ私たちとしては、子どもたちの県名認知度がこれで十分であるとは思いません。

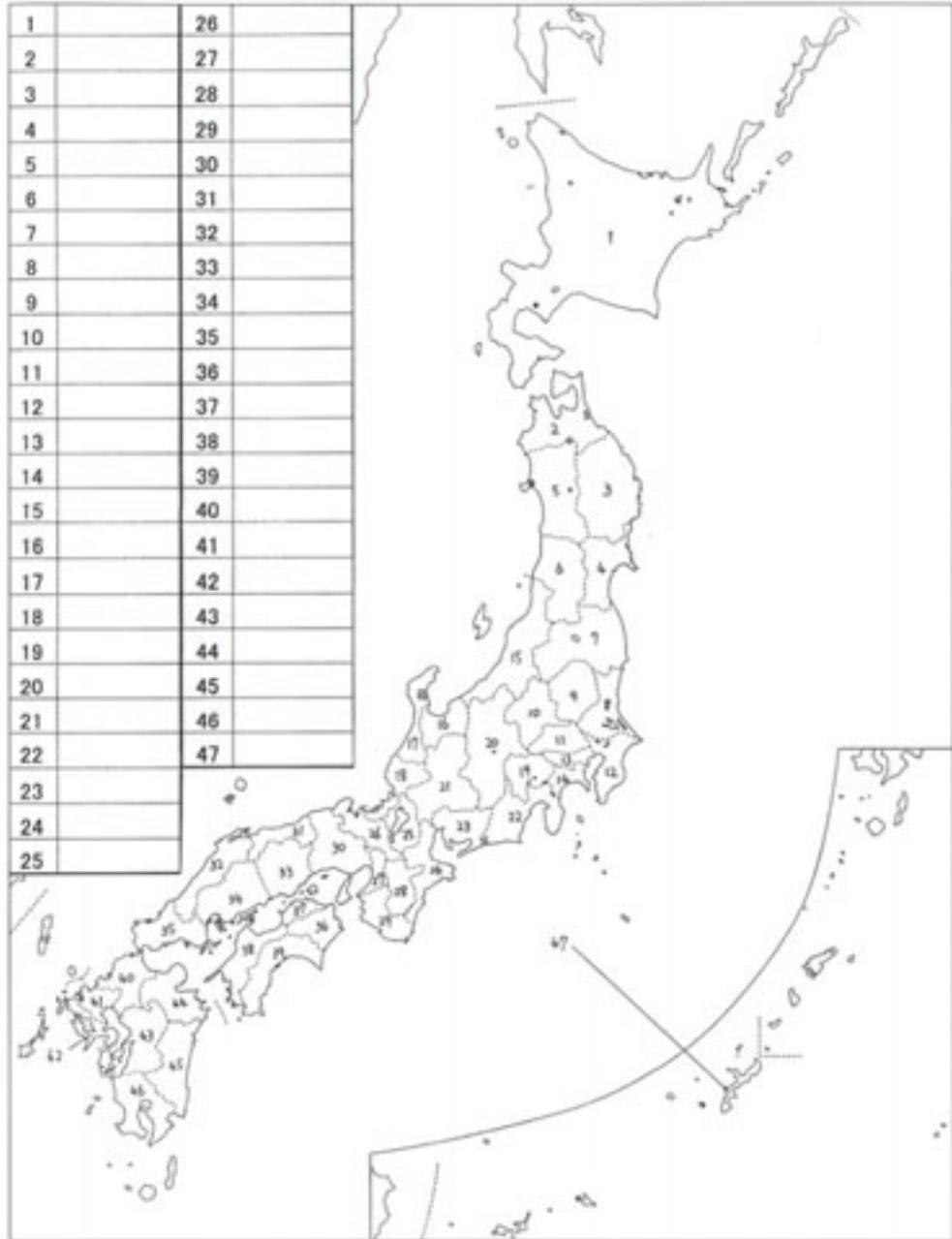
国際理解教育が重要であることは、無論いうまでもありませんが、自國のことについて正しい認識を持つことも、より重要なではないでしょうか。それぞれの県や地方についての情報やイメージを蓄積していくことは、子どもたちにとって、非常に大切なことだと考えます。そのためにも、「都道府県」の名前と位置を認知することは、基礎中の基礎といえるでしょう。

作業 あなたが知っている「都道府県名」を教えてください

今地図に書かれている、1~47の番のなかで、あなたが知っている県名を、下の「かいざらん」に書いてください。

- ※地図の番号と、かいざらんの番号はあわせてください。たとえば、1の番の県名を知っているのなら、かいざらんの1のところに県名を書くようにしてください。漢字がわからなければ、ひらがなで書いてください。
- ※もし県名は知っていても、場所がわからない場合は、あてずっぽうで書いてもいいですよ。
- ※地図番などを用ずに、自分一人の力で答えてくださいね。及だとも、そうだんしないでください。

1		26
2		27
3		28
4		29
5		30
6		31
7		32
8		33
9		34
10		35
11		36
12		37
13		38
14		39
15		40
16		41
17		42
18		43
19		44
20		45
21		46
22		47
23		
24		
25		



中学校段階では、日本の県名と位置に加え、県庁所在地、さらに世界の主要国と日本の近隣諸国（約50~70カ国程度が目安）の国名と位置の認知、獲得を、求められます。これらをまとめて身につけるのは、かなり困難なことだと思います。

だからこそ、小学校中学年の段階から、各学習内容と関連づけながら県名と位置を少しずつ認知させていき、小学校卒業までに、おおよそマスターできれば、後々の子どもたちの負担を少しは軽くできるでしょう。

「地図帳や県名指導は必要でない」と考える先生は、ほとんどいらっしゃいません。大半の先生が、「日本や世界の様々な地域のことを認識させたり、興味を持たせるために地図帳は必要なもの」として、とらえていただいているようです。

筆者班では、先生方にも地図帳に関するアンケートを実施いたしました。

その中で、「地図帳は必要」と答えられた先生は、回答者350人中、300人に達しました（約85%。残りの回答は、無回答および、「わからない」という回答が大半。「不要」と答えられた先生は1%もいませんでした）。

是非とも、一人でも多くの先生方にこの冊子を読んでいただき、これらの結果を今後の地図指導や県名指導に活かしていただければと存じます。



都道府県のパズルで学習する子どもたち

小学校冊子 2003年度 特別号 Vol.1

「地図帳好き？ 嫌い？ この県知ってる？」

発行日 2003年4月1日 定 價 100円

発行所 東京都千代田区神田神保町3-29

株式会社 帝国書院 発行人 白浜 謙男

電 話 03-3262-0831 <http://www.teikokushoin.co.jp/>